

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10

本郷瀬川ビルテ113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

039 NOVEMBER 20.
1997

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集テーマ：京都

1. 京都<デザイン環境都市宣言>の提案… 1
2. 京都が今後進めるべき取り組みについて 3
3. 京都の進めるべき環境デザイン… 5
4. 京都デザインへ向けて… 7
5. 京都の景観から学ぶもの… 9
6. 都市環境デザインに視点をおいてみると、
<京都から学んだこと><京都から学ぶ
べきこと>があるか… 11

7. 景観規範としての京都… 13
 8. 京都を脱出して… 14
 9. 京都はヒーリング都市か… 16
 10. 寸評… 17
- ブロック例会レポート
- 北陸ブロック… 21
 - 北海道ブロック… 23
 - 四国ブロック… 25
- 事務局より・編集後記… 28

特集：京都

特集

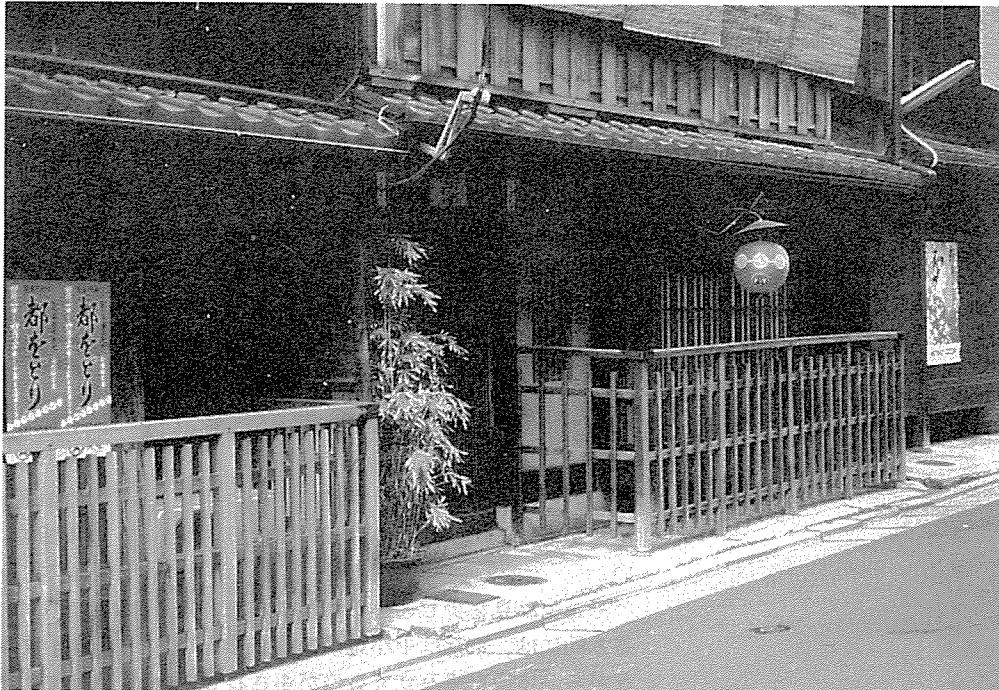
1

京都<デザイン環境都市宣言>の提案

田端 修

TABATA OSAMU

大阪芸術大学



祇園新橋伝建地区

—京都は特殊な都市やから参考にならん

—京都は古いものを大事に守ってくれたら

それでよろしい

—京都は最近は大したことやってないなど、京都の都市環境デザインが影響力を失いつつあるとする意見は多い。都市デザインの側面からみると現代的役割を期待されていない感さえあるということになるが、本当にそうか。

わたしはいまは大阪に住居と職場をもっている、が京都の都心近くで生まれ育つたこともあって、その都市計画やアーバンデザインに関する提案や実務にも携わるチャンスに恵まれてきた。それでも上述のような批評を耳にすると、さてどう答えるかと迷ったり、少々力んで話題をつくってみたりなどする。「そんなことはない」と、ス

トレートに反応するほどの確信はないのである。

都市づくりの背景的条件からみると、京都は特異な立場にあるとはいえよう。すなわち、わが国都市市街地の大半を焼きはられた第二次大戦による都市空襲を免れたことは想像以上に大きな事件である。1200年にわたる時間を首都であり続けたという歴史は、都市空間の変遷に関する詳細な記録・記述を残すとともに、それらが「現場」に、まさに歴史的環境としてストックされているのは、非戦災都市という条件があることによる。

これらが戦後の新規開発・大量建設指向の都市政策の実施を制約する材料となったのは言うまでもないことだ。

戦災復興都市計画が日本全土を覆ってい

た時代に、京都だけは常日頃と変わらぬままに生き続け、近世以来の西陣織・京染め・京焼をはじめとする伝統産業が基幹産業として一定の力を保ち続けたことから、戦後の産業転換期にも前向きに取り組むことを怠ったこともある。

だが、産業にしても、建築物にしても老朽化していく。働く場所も住む場所も時間の経過のなかで壊れていく。とりわけ近代日本は、西欧の都市・建築制度を消化するに急で、伝統的な都市空間や建築を継承する方策を完全に忘れ去ったままに過ごしてきた。それらの連続的更新策に关心を向けることができたのはつい数十年前のこと、明治維新から100年を経過した頃のことである。そして、そんな事情にはお構いなしに、中高層ビル化や車社会化、都市機能の都心部への集中などなどは容赦なく市街地を襲うことになる。

以上のように大きな諸制約と都市開発のエネルギーがうず巻く都市・京都に、一般的な都市整備手法を持ち込むには相当の工夫が必要である。もちろん、都市構造の改変につながるほどのビッグプロジェクトは周囲を山地に囲まれた小盆地では困難だ。多くの都市が進めているような埋立地をテコにした新しい都市機能の開発などありえない。京都は、さまざまの特異性に時になじみ、時にはこれを乗り越えながら、未来を切り開く方策を見出さざるを得ない。

冒頭に示したように、京都はこのような意味からは、やはり特殊な都市にちがいない。

そこで私見を少し述べることにしたい。基本的には、京都は中小規模の開発を重ねながら全体像を組み立てるのがふさわしいまちであろう。力で押しまくる方法ではなく、高度の構想力とデザイン力によって未来ビジョンを発見・発明できる都市であるというふうにも言えるだろう。

考えて見れば、近代から現代にかけての時代的問題は、価値基準一もの勘定の仕方一が一元化し、それはすべて東京で作成

されるという一極構造が完成してしまっているところにゆきつく。近世期には少なくとも、江戸・京・大坂の三都が異なる価値基準によって個性的な情報と文化を発信していた時代であった。全国諸藩はそのどれでもお手本にすることができたし、その結果として独自の地域づくりも可能になったのである。

そういう意味から、わたしは、さらに現代的あるいは未来的な水準をもつ「京都型価値基準」を創出するプログラムの必要性を強調したい。蓄積され京都の歴史的・文化的なエネルギーを再集約するなら、新しい価値基準を打ち立てることは十分可能ではないだろうか。そして、プログラムの第一歩が、都市環境デザインの分野からスタートする、ということも当然の経緯であろうと思う。

その片鱗は種々の景観制度の整備状況に見ることができる。都市美観のコントロールを行う制度としての「美観地区」は先年の改定で1,804ヘクタールに拡張され、また自然風致の維持保全を目的とする「風致地区」は約18,000ヘクタールに達し、市街地を大きく取り囲んでいる。しかもその厳格な取り組みは、建築関係者にとって「京都はうるさい所」と嘆息させるまでになっている。これらを含め、〈デザイン環境都市宣言〉といったあたりからスタートして、「京都型価値基準」を磨き上げるということである。

これを補なううえで、外来の知恵と力を積極的に導入する仕組みを意識的に方法化することも必要である。かつての京都がたえまなく文化・文明を創造しつづける「都」であったのは、計り知れない何かを求めて京都を目指してやってきた人びとの賜物であったといえよう。その頃の京都は人びとに夢や可能性を感じさせる希望の都市であったのだ。いま、そのような魅力は、きわめて意識的につくるしかない状況にある。

たとえば、京都のまちが奥深く潜めている環境デザインや生活文化などに関わる情



先斗町の屋



中京のマチナカ

報は、再編集されることによって他に類をみない質を獲得しうる筈である。だが、そういう情報は私藏され、かつ死蔵されているように思われる。その開放のしきみが形成されるなら、多くの腕達者がやってくることは請け合いである。

この特集では、上述の視点とも関連して、京都の都市環境デザインの現在および未来について、京都に対してさまざまな立場をもつ方々から、意見や議論をいただきたいと考えた。そのための一応の枠組みとして、以下の視点を用意した。

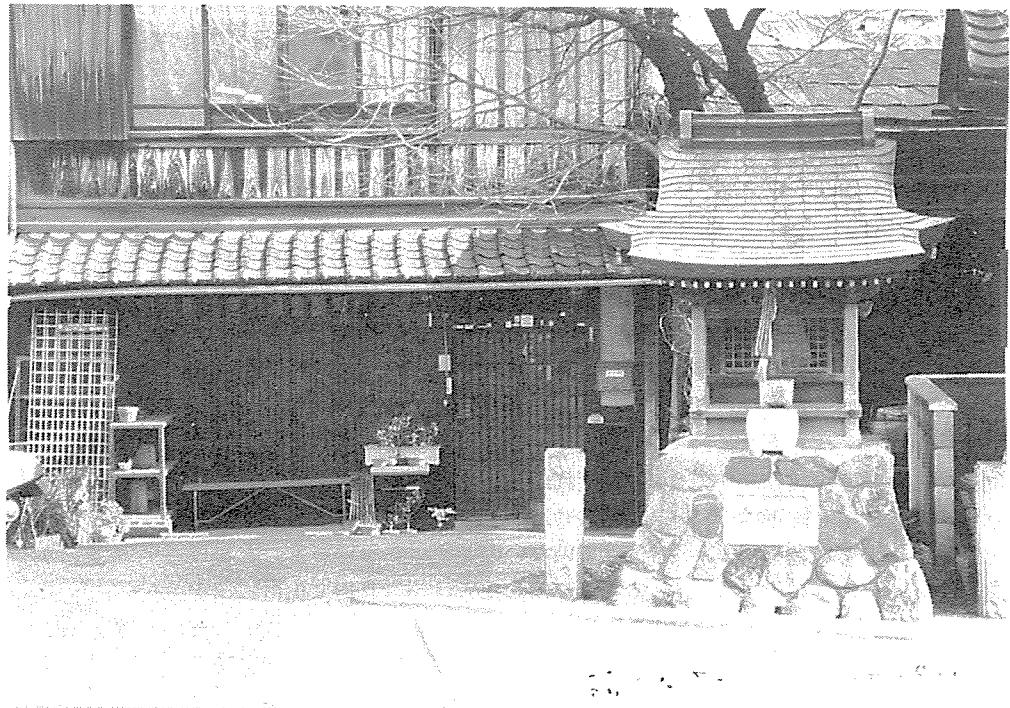
1. 現代京都のなかに、<参考しうるもの><面白いと思うもの>など、<評価に値す

る都市環境デザイン>があるか。

2. 都市環境デザインに視点をおいてみると、<京都から学んだこと><京都から学ぶべきこと>があるか。

3. これから京都環境デザインの展開のなかで京都が果たすべき役割について考える時、<京都はこういうプロジェクト、取り組みを進めるべきである>という提案。

また、<寸評>のコーナーを設け、より多くの皆様から京都の都市環境デザインの現状や近作についての一言をいただくことにした。これらの結果、じつにたくさんの方々の貴重な時間を頂戴することになってしまったが、ご寛恕をお願いしたいと思う。ご協力を感謝します。



地蔵祠

特集

2

京都が今後進めるべき取り組みについて

-京町家保存の立場から-

杉本 節子

SUGIMOTO SETSUKO

財団法人 京町家保存会

私は、京都下京にある明治3年上棟された京町家に生まれ育ちました。主屋と元治元年（1864）のどんどん焼けで類焼をまぬがれた土蔵3棟は、平成2年に京都市から有形文化財の指定を受けました。そして、平成4年に財団法人設立の許可を得て今日にいたっております。

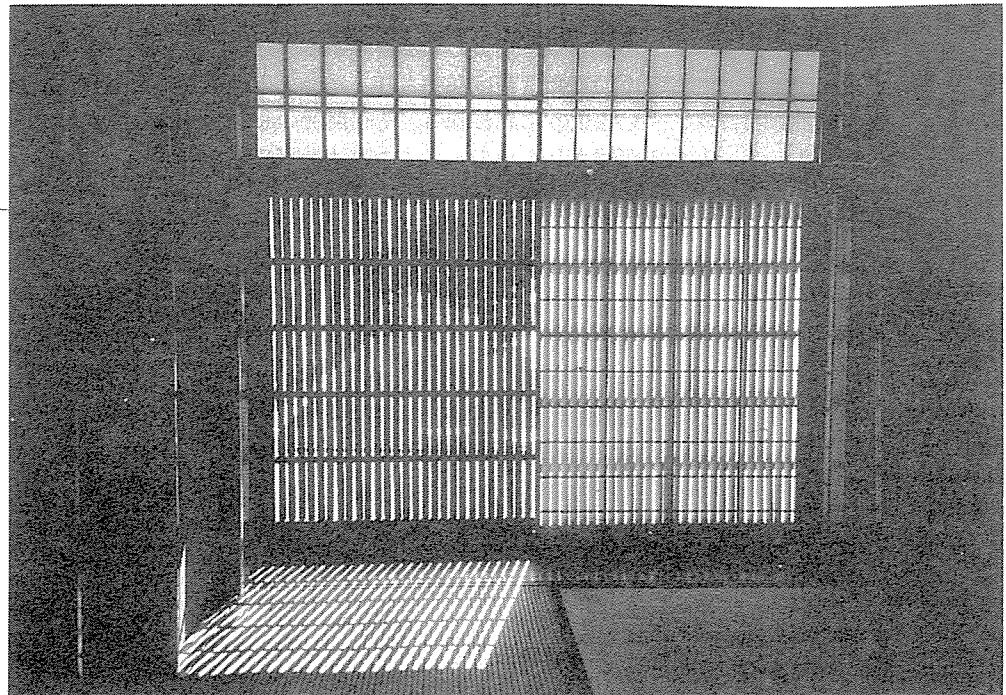
建築物の傷みなどを考慮して、常時、一般に公開することはせず、当保存会会員にのみ、当家に伝わる年中行事（春の雛飾り、夏の祇園祭屏風飾り、秋の企画展）を中心とした見学の機会を設けています。

訪れた人々は異口同音、まず「お掃除が大変でしょうねえ。」次に「ここで暮らしておられるのですか。」そして「改築などできないから生活に不便でしょうねえ。」と判を押したかのようにおっしゃいます。

はじめのふたつの問いかけに対しては「yes.」、みつめについては「no.」です。常に雨戸を立てて閉め切り、見学者が来訪する時にだけ開放するのではなく、普段の暮らしをそのまま続けながら町家の維持に努めているのです。

家は、人が暮らすことで潤います。特に町家のような木の家は、毎日の拭き掃除など、生活する中で人が木肌に直接触れることが必要なのです。人の住まなくなった家は外から見てもすぐわかります。木に蓄えられた潤いは埃にどんどん吸い取られ、家はあつという間に枯れてゆきます。町家は、人が暮らしを営む生活空間—住宅であるのに、町家博物館になってしまっては、その存在の意味はなくなってしまうでしょう。

家の中で便利さや快適さだけのために改



町家の陰影ー京格子

築したところはありません。例えば、台所なら、おくどさん（竈）がそのまま残され、天井は本二階建ての吹抜け、足もとは走り庭といって、土間のようになっています。だから、冬は底冷えに耐えなければなりませんが、ガスレンジ、冷蔵庫、電子レンジを使っているのは、どこの家庭とも同じです。それから、夏、私の家ではクーラーをつけません。どの部屋にもクーラーを取り付けていないのです。こういったことを目のあたりにした人は、「有形文化財に指定されると台所に床暖房したり、壁にクーラーを取り付けたり、アルミサッシの窓に変えたり、暮らしやすいように手が加えられなくなるから大変でしょう。」とたいそう気の毒がってくださいます。たしかに寒い土間で台所仕事をしたり、猛暑をクーラー無しで過ごすのには我慢が必要です。けれども、ここに暮らしている私たちには、文化財指定されたお蔭で我慢を強いられているなどという感覚は、全く無いのです。我慢できないのなら、指定を受ける前に台所はおくどさんを壊して床板を貼っていたでしょ



町家の陰影ー台所

うし、とうに家中アルミサッシにしていただしよう。なぜ、しなかったか。それは、私たちのすまい、暮らしのたたずまいに、それらが似合わなかったからにほかなりません。

家そのものが、そこに暮らす者の感性の基準となり、取捨選択の感覚をも育んでしまう、そんな不思議な力が家にはある。そして、この、家が持つ見えない力と同じものを、かつての京都は、都市の力として備えていたのではなかったかと私は思うのです。

先日観た狂言、「末広かり」にこんなセリフがありました。主人に買物を頼まれた太郎冠者が里から都へやってきたくだりです。

さればこそ、はや都へ上りついた。ハハア、また田舎とは違うて、家建ちまでも格別じや。あれからつうっとあれまで軒と軒、棟と棟、仲よさそうにひっしりと建て並うだほどにの。

家並が揃って美しいという京都のあたりまえは、今では京都のはかない夢となってしまったことを改めて胸に突きつけられたかのようでした。かつて家を建てる時に最も気遣われたのは、両隣は勿論のこと、通りの家並の均衡を乱さぬようにすることでした。美しい都市景観を呈していた京都の面影は、市中に残る明治初めに建てられた数件の町家にみるばかりです。

物心ついてから今日までの20余年を振り返ってみましても、その都市環境デザイ

ンー景観の変貌ぶりというのは大変なもので。家の周囲は年々ビルに取り囲まれるようになりました。そのビルはマンション、シティーホテル、商業ビルですが、制限めいっぱいまで建てられた高さを除いてデザイン、色、形は皆ばらばらです。それに、最近は、目の奥が痛くなるほど皓々と蛍光灯を24時間照らし続けるコンビニエンスストアも増えてきました。どれを取ってみても、京都に似合うものはひとつとではありません。仮に、評価に値する都市環境デザインがあったとしても、それは、統一感のないモザイク模様の一部分に過ぎないというのが今の京都の現状でしょう。

財団法人発足以来、それまではプライベートだった家の内部まで公開することになったわけですが、それは「観られること」と「暮らすこと」が表裏一体であるという

観光都市—京都の宿命を、縮図にして経験するということでもありました。表裏一体のバランスを崩さず保つのは、なかなか骨の折れることです。

パリのセーヌ川に架かる橋とおなじようなものを鴨川に造ることが、世界に誇れる自国の遺産を多く有する観光都市としてふさわしい選択なのでしょうか。四条大橋に立ち、薄墨に幾重にもなる北山を眺める景色がつまらなくなってしまうのは残念なことです。観光ばかりを意識したのでは、京都のよいところはかすんでしまいます。暮らしの中に、なごみが感じられない都市環境を強いられるのはごめんです。

このような、建築の専門家でもない一市民の嘆きやつぶやきは、いったいどのようにして都市環境デザインに反映されていくのでしょうか。行政にはなかなか届きません。それを届かせるための具体的な方法が身近にあるでしょうか。また、それを具体化させる努力を私たちはしてきたのでしょうか。似合わないものを、そうだとはつきり否定する場や、京都だからこそ認められる新しい制度を持つことへの努力をせず、内に籠って不平不満ばかりを言ってきたのではなかつたでしょうか。

私は、町家だけが京都に似合うものだと言いたいのではありません。町家の連なりが生み出した美しい町並に匹敵する、京都に似合う統一感のあるデザイン、色、形の提唱、制度化への取り組みを進めるべきだと思います。町家にはそのヒントとなる要素が多く備えられているはずですし、そのことを見落とさず、町家が生きたモザイクのひとつとして存続できるような都市環境デザインが創造されることを願ってやみません。



火見櫓から一四条通りに建つビルの裏側

京都の進めるべき 環境デザイン

山崎 正史
YAMASAKI MASAFUMI
立命館大学

日本の諸都市は、これまでの未来派指向の延長線上で、ますます新しい空間形態をつくりだしていくだろう。そのことは、人類が集まって働き生活する場、集住の場として新しい実験を行うことだともいってよい。その中で、京都ばかりは、日本の都市的集住の原理と原則を伝える町づくりを進めるのがよいと思う。他の実験的都市の住人が、時に京都を訪ね、歴史の中で蓄積された集住の知恵を見直し、そこからヒントを得て帰れるような京都であってほしい。

そう考えて、ここでは次の5つのテーマ
1.地表に暮らす都市 2.環境負荷の小さい都市 3.歩ける都市：都心回廊と文遊回廊 4.洛中洛外都市 5.歴史的時間を

表現する都市について述べたい。

1.地表に暮らす都市：地表都市

人類の歴史はじまって以来、ほんの100年ばかり前までは、地表かその近くで暮らしてきた。人の健康も感性も、それを良しとするように生まれついているのではないか。高層住宅で、犬や猫も飼えず、蝶・昆虫・鳥など人間以外の生物から疎遠に、花や樹木からも離れて暮らすこと、そういう場所で子どもを育てるのを京都ではないようにしよう。フィンランドでしているように、住宅は樹木より低い高さにしよう。できれば職場も樹木より低くつくるのが望ましい。

地下都市には反対したい。そのかわり、

サンクン・ガーデンを設け、それに面して居住と労働の空間を配置しよう。それなら地表と変わらない。地表とサンクン・ガーデン都市。現在のような閉ざされた地下街で、買い物する人は良いとしても、働く人の人生は不自然ではないだろうか。住宅環境だけでなく、快適な職場環境の実現は次の世紀のテーマとなるべきだ。

2.環境負荷の小さい都市：自然共生都市

夏はよしずの障子に入れ替え、坪庭と表に打ち水をして涼をとってきた。それが例え無理でも、都心にヒートアイランドを発生しない工夫を他都市に先駆けて実践したい。透水性舗装、土の露出した庭、空地には樹木を植える（駐車場にも）。都心でのマンションや新築建物にも坪庭（人工地盤、屋上を利用した立体的坪庭も可）を促進する優遇措置を導入する。伝統的な生活の知恵を伝える一方で、コ・ジェネレーション、水再利用システムなど環境共生型都市づくりのための新しい技術とシステムの先進都市をめざす。

3.歩ける都市：都心回廊と文遊回廊

歩行者と自転車のための道に、自動車道と同じ権利を与えよう。面積的に同じにしようというのではなく、機能的に同等という意味である。低速系道路（歩行者と自転車用）のネットワークをつくり、自動車系ネットワークと重ねて都市全体の道路体系を構成しなおす。

都心回廊：都心部では一方通行の指定を変えて、ジグザグ型、コの字型の自動車ルートをつくり、都心での低速系の道「都心回廊」を生み出す。ぶつかりあう交差点ができるが、信号を設置すれば解決できる。学校、店舗、公園、公共施設など日常生活のために必要な諸施設と都心住宅を都心回廊で連絡する。都心回廊が整備されてこそ、都心居住促進政策は正当化される。

文遊回廊：江戸時代以来の名所を訪ねる低速系のネットワークをつくる。忘れられた名所を復活・再整備して、土地の歴史的文化的意味を浮かび上がらせ、それらを結ぶ道を京風を保全的または継承的に表現する景観として整備する。これによって、観光客に歩いて楽しめる京都を提供すると同時に、市民に文化的薫り高い環境を提供する。

4.洛中洛外都市

都心の市街地と周囲の三山の緑豊かな環境を密接に結び、両者で京都という都市環境を構成するという考え方のもとに整備をはかる。これを「洛中洛外都市」構想と呼びたい。

都心回廊からつづく文遊回廊を三山の

麓にまで延ばし、都心と三山の緑を低速系の道で結ぶ。三山は都心から自転車でも歩いてでも日帰りできる距離にある。

三山の麓の社寺境内の整備を補助し、その他各所に緑の中の行楽地を設け、緑地の維持管理をはかる。人の手を入れない緑地保存ではなく、観賞用の樹種を管理育成し、鬱蒼とした場所でなく、市民が安心して入れる明るい行楽地を用意する。これによって、大規模な都市公園にかわる機能を充足する。

5.京風景観の保全と継承：歴史的時間を見表現する都市

明治以降の京都は日本の中の一地方都市にすぎないという厳しい事実を私たち京都市民は確認しなくてはならない。しかし、平安建都以来およそ一千百年間におよぶ長い間、京都は都であったこと、それ故、その間の貴重な文化遺産が今なお多数存在し、また継承されていることは、現在の日本の中でも極めて特殊な特質と言わなくてはならない。日本政府が京都を一地方都市としてのみ扱っている現況は、私には間違いないとしか思えない。指定文化財以外の全ての文化財と歴史的景観を破壊する権利が京都市民にはある、とさえ思える。しかし、京都市民はそうすべきではなく、その保全と継承をはかってほしいと切に思う。京都市民じしんのために、そして（こういう大げさな言い方には恥ずかしさが伴うけれど）歴史文化を愛す日本中の、世界中の人々のために。

他都市とは例えまったく違う景観になろうとも、京都は伝統を継承した和風の京風都市景観と環境を発展的に継承していくといい。

名所の復活と保全：江戸時代の「都名所図会」に紹介されたような名所のすべてを地域文化財として指定または登録し、その整備と維持管理をはかる。それによって、京都の各所が歴史的な物語と意味を復活する。奥行きのある様々な時間がそこに表現されるだろう。

勾配屋根の都市景観：以前から提唱されてきたが、具体的な案として、屋根の40～50%以上を勾配屋根とすることを原則とする案を提言したい。空調設備や洗濯物干しなどのため陸屋根も今では必要な場合も多い。また、屋上庭園、屋上坪庭もあってよい。何の利用もしない陸屋根はつくらないことにする。これによって京都の大景観は京風になるだろう。

眺望視線の保護：現在の京都の景観制度は優れたものではあるが、不十分な点もある。眺望視線の保護制度のないこととは残さ

京都デザインへ向けて

材野 博司

ZAINO HIROSHI
研修・研究委員

京都工芸繊維大学

れた大きな課題である。鴨大橋以南の鴨川の橋上から大文字が見えなくなること、その他の送り火も何時隠されるか分からぬこと、八坂五重塔がビルで隠されるかもしれないこと、などは京都の景観にとって大きな問題であろう。一定の視点場からの視線そのものの保護をはかる制度の導入が必要だ。この実現は現状では、視線に入る地域の住民の経済的犠牲なくしては、ほぼ不可能だ。私個人は、日本人には土地で利益を得る権利があるという考え方に対する疑問を抱

いているが、こういう話は通用しないだろう。経済的不平等を避けるには、日本の土地制度の変革が必要と思われる。土地の売買を土地に付随する条件付きとし、その上でTDR（空間開発権の移転）制度が導入できれば、眺望視線の保護には有利である。たとえば東山の一定地域の上空開発権を南の新油小路付近へ売れるようになることができる。一度開発権を譲った後は、開発権を制限された土地の売買が行われることになる。

1. 現代京都で評価できるもの

人々、歴史的空间で、豊かなものを改変し、それ以上に良い空间にすることは困難であり、その改変によって、豊かさや歴史性の消失を最小限に押さえるのが評価の基本であろう。しかし、一方で、歴史的都市京都も、新しい時代に対応して、経済性と利便性のある程度は向上させねばならないことも確かである。この両方の視点から、大枠では京都市において、京都駅よりも北側は保全、南側は開発、その中間の京都駅付近は緩衝空間という住み分けの合意が形成されつつある。その意味では、この住み分けの方向に沿った整備が評価の高い都市環境デザインということになるが、かと言って、北側の保全ゾーンにおいても現実は開発行為が進むわけであり、現代の京都問題は北側の保全的ゾーンでの評価できる整備ということになろう。この視点から見た評価対象は次の3つである。

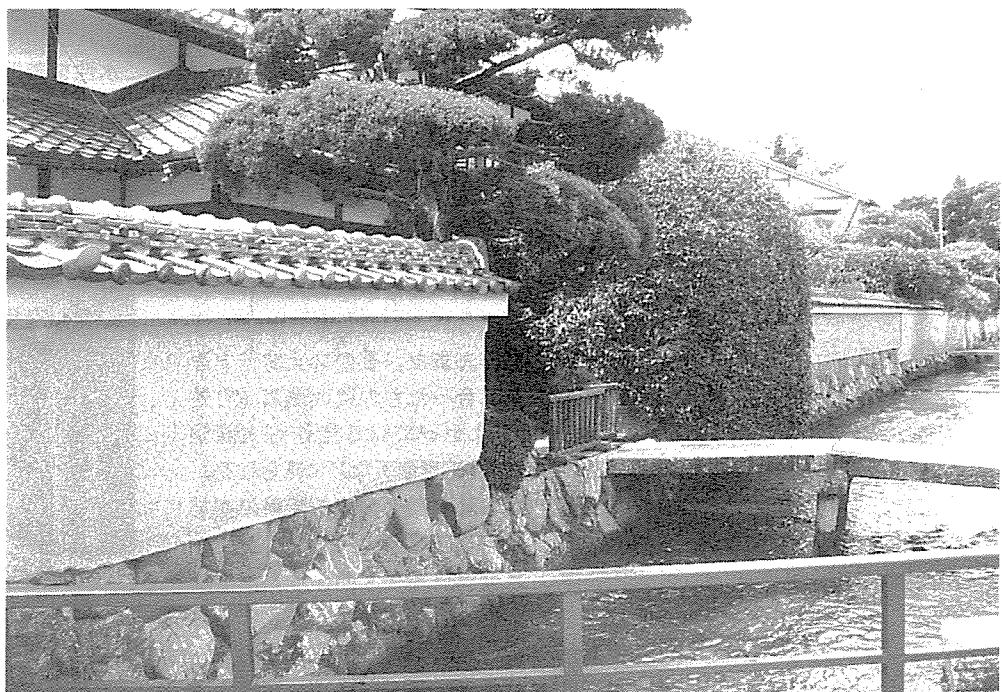
(1) 大量輸送機関（軌道車）の地下空間化の活用

最初、阪急、次に京阪という私鉄が先行し、次に公共交通としての地下鉄、南北線、東西線が続いてきたが4つの乗換点を持つ、変形井桁パターンを形成することになった。地上平面交通による交差分断が無くなるとともに、景観的にも近代移動物が地下にくることになり、京都のような歴史的都市でこそ大きく評価されるべき開発行為である。

(2) 現代建築による都市空間への寄与

京都では、評価される程の公開空地はまだ現れていないが、単体による前庭広場で秀逸なのは河原町に面する朝日会館であり、待合わせ、人ごみの退避等々、様々に利用されているが、これに似た空間としては住友信託ビル等々にみられる。

水辺空間利用の建築としては、三条小橋に面して、高瀬川沿いに、昔、安藤忠雄が設計したタイムズは、その建築自身が水辺



伝建地区としてのたたずまいを持つ社家町

性を得たのは当然のこととして、通路が水辺に面しており、その建築の材質感も無彩色系で、京都的環境へプレッシャーをかけるものでは無い点が評価される。この高瀬川への親水性の確保のために、京都市では四条通りの北と南に川辺に降りる小広場をつくっており、特に北側は、夜、若者達の語らいのコーナーとなっている。

(3) 外観保全・内部活性化

外観保全による内部活性化が京都で広く行われるべき最もベースとなるものであろう。これには先ず、伝統建築群保存地区整備があるが、北から、上賀茂社家町、嵯峨鳥居本、新橋、二年坂・産寧坂の4ヶ所がある。都心付近の祇園のお茶屋という時代のニーズによって室内機能の変化が求められることへの回答として内部はがらりと改装して、外観はそのままのお茶屋が幾つか見られる。



古い町並でも活気のある産寧坂



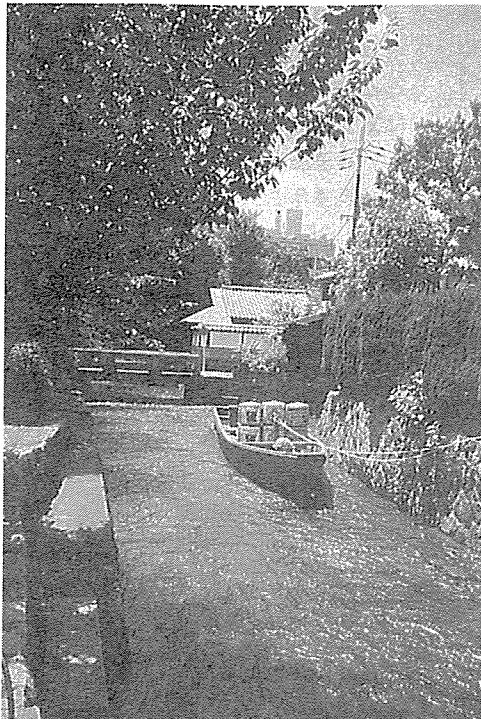
ファサードは全く伝統的だが、内部はナウイ店も見られる新橋

次に、町家の改造整備があるが、外観は全く変化しないで内部を現代生活に合わせたものがよく見られ、その佳作として吉原邸があげられる。また、そのファサードを町家の雰囲気に合ったものに改造し、町並みとの調和をはかっている佳作も大龍堂（本屋）や若林建築事務所などに見られる。

全国的に見られる蔵や倉庫の活用の京都版は、伏見の酒蔵を保全しつつ、内部での地ビール、ビヤホールや大酒房にした空間である。

2. 環境デザインが投げかけるもの—京都から学んだものと京都デザインへ向けて

先程のタイムズの建築を評価したが、そ



角倉了以の水辺遺産・高瀬川

のことをあるミニシンポジウムで述べた時、フロアにおられた京都の方から「しかし、高瀬川の良さの一つは、歩行レベルと水面レベルの関係が保持されている所にあり、水に近づくために、その関係を変えては価値が下がる」という意見を出された。確かに、現行より一層の親水性を得るということは、現在の環境空間をより豊かにすることにはなっても、そのために高瀬川というもののアイデンティティを少しでも損ねることになるならば、控えるべきであろう。ただ、ここで問題なのは、川辺の水面と陸との高さ関係では見る水辺であっても触れる水辺になっていないものであり、ここで高瀬川は陸面を降ろして、触れる親水性を確保するか、それをあきらめて歩いて見て感じる親水性にとどめることで価値があるという方向を進むべきか、が問われるものであろう。



赤い鳥居が伝統的町並にポイントを与える鳥居本

このように京都は、ある一線を越えては、京都のアイデンティティが消えるものが結構多いと思うが、そのことを考える上で面

白い例として、鴨川上流のダム建設への反対運動がある。ダム建設を拒否すると洪水時に中心市街地が水びたしになるので、川底をさらって低くする案が出たが、市民はそれにも反対し、洪水を覚悟するということになったようである。結果として、洪水の大変さよりも親水空間性を選択したことになるわけであり、洪水とて、鴨川のたたずまいを変えることができなかつことと言えようか。

しかし、一方で、京都の北側ゾーンの中でも、より一層の保全ミニゾーンと整備ミニゾーンという小割りの住み分けによる活性ゾーンの育成も見られる。

現在、北山通りは後発で街路沿いは、歴史的建造物が無く、一方で賀茂川—高野川という川と川とを結びながら、賀茂川寄りに府立植物園の緑のある雰囲気の良い街路に接した楽しい建築が並んでおり、やや統一性に欠ける点があるものの独特の通りを形成しつつある。

この位置は保全すべき町家ゾーンから離れ、かと言って、歴史的寺社ゾーンからもやや離れながら、それらのアプローチ起点である所に特徴があり、内外の人々を集めている。また、その付近には小生のいる京都工芸繊維大学やノートルダム女子大学等



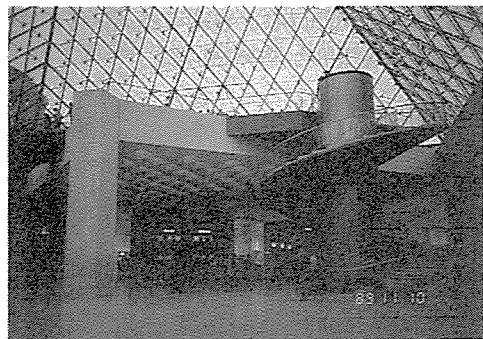
地下へ広場を埋めこんだレアール

の大学やコンサートホール、庭園美術館等の現代的公共文化施設が並び、豊かな文化環境となっている。それらが総て、建築の自由さと一体となって、多様な面白味をつくり出しており、今までの京都と違う雰囲気を漂わせている。

このように、ある限定された領域ならば京都の北側ゾーンと、現代的で自由な小ゾーンがある方がかえってやや離れた歴史・文化遺産の存在が生(は)えてくるものである。

しかし、それには、現代が歴史遺産に接近し過ぎないこと、あまり現代を主張する構築物や色彩の強いもの等は例え特定小ゾーンであろうとも京都にふさわしくないこと、小ゾーンを構成する単体の規模が大き過ぎないこと等の条件が満たされている必要がある。

これらは地上での小活性化ゾーンであるが、私は京都こそは地下空間への志向を強めるべきであると思う。先ず、現世的に言えば夏暑く、冬寒い京都にとって、地下空間ほど快適な空間は無い筈である。次に、地下への開発エネルギーは地上の歴史遺産と景観的にも競合しないものであり、現代の技術と豊かな空間への蓄積を京都の地下空間に注いで欲しいものである。



ルーヴルへの地下エントランス

特集

5

京都の景観から学ぶもの 中景景観を意識から消し去る京都人

道家 駿太郎
DOUKE SHUNTARO
岐阜女子大学

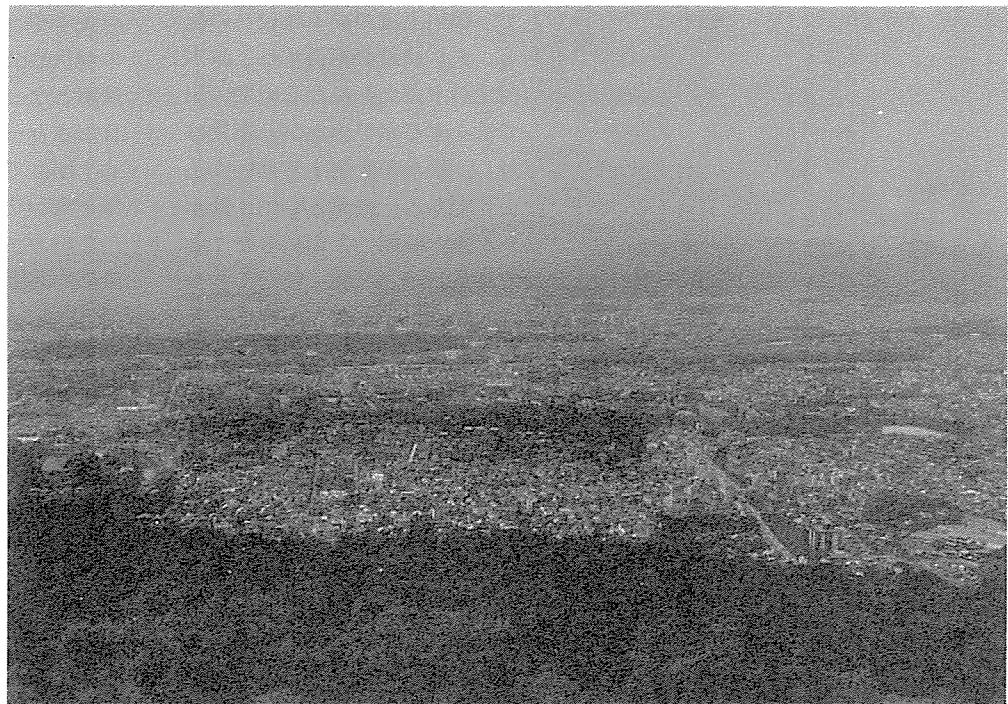
京都の全貌をつかむには、まず大文字山に登り、京都を一望する事である。

一般的には街を俯瞰しても、その街の地勢や大まかな町の様相が漠然と見えるだけである。しかし大文字山からの光景は単なる街の姿に止まらず、京都人の気持ちや価値観が見て取れるのである。

銀閣寺の脇から山道を三十分ほど深い木立の中を登ると、突然大の字の中心に出て、眼下に京都の街が広がる。正面に西山、右手には北山の幾重にも重なるやまなみが囲むように迫る。少し湿った空気に霞む大小のビルや家々の屋根が広がる中に、吉田山、そして鴨川のながれ、糺の森、御所の森、と緑の帯が吹き流しのようにただよっている。

大文字山から手にとれるように見える範囲、これが京都であると今さらのように納得させられる。

30年前に京都に移り住んだ頃、さる旧家の陶芸家に一言「大文字焼き」と言ったとん酷くしなめられた事がある。多くの京都人は大文字に「焼き」を付けたとき、異常な程の嫌悪感や怒りを示す。町うちの京都人にとって日々仰ぎ見る東山や大文字、比叡山は特別な感情を抱いている原風景であり、潜在意識として日頃と異なった呼び名で呼ばれることに嫌悪感を抱く。まさに行事や風景が心の中に深く刻み込まれた京都のアイデンティティであり、文化ともなっている。大文字に登って京都を俯瞰するとまさにこの思いを感じるのである。



大文字山からの眺望

昨今の景観論争における京都市民の反応も、大文字山から見ると一理有るかなと思われる。京都ホテルは角張った硬質な姿が町中に突出して、比較的間近に異物の様に望見されるのに対し、京都タワーや京都駅は霞んだ彼方に「あそこが京都駅か」と認識される程度のランドマークとして分かる程度である。京都人にとっては他人ごとの場所となっている様が見られる。

京都人はこの様に景観に対してひとつの聖域を持っており、一般的に緑が大切であるとか山並が親しみ易いといった感情とは別の信仰であるとも言える。

従ってこれら東山や北山、大文字、比叡山等以外の緑については冷淡と言える程無関心な面も持っている。町中の緑の少なさや、特に京都南部での緑地や景観への無関心さ等例をあげれば暇が無いほどである。

このように市民が共通して潜在的にしろ強固な信念を持っていることは、景観保全を考える場合問題を極めて単純化してくれる。大文字山の裏山のゴルフ場計画がいとも簡単に中止されたことを見ても明らかである。

どちらかと言えば遠景の景観に関してこのように絶対的に守るべきものを持っているにも関わらず、市民の町並み景観に対する関心は一挙にアイレベルの極めて身近な近景に移る。

都心の道を歩くと4、5階建ての新しい建物の1階部分に瓦の軒や付け柱、のれん、和風のショーウィンドウ、犬やらい等などいわゆる京都風、和風のアイテムが当たり前の様に設えられている。

我々が日頃京都らしい景観として感じる町家の連なる町並み景観にたいして、町中に住む京都人はほとんど愛着を感じていない様子である。しかし直接目に付く1階部分については、自分達の商売上の必要性も含め和風や京風のしつらえが当たり前の様に求められていて、それが感性の一部となっているようである。

日頃相談を受ける建物の建替え等の場合、こと建物のデザインについては「大文字」の様な強固で絶対的な価値観を持つことは稀で、単に機能的であること、合理的であること、リーズナブルであること、自尊心がみたされること（立派である、良い工務店に造ってもらった）等であって、町並みとしての美しさや町全体としての快適さに対する関心が極めて薄い市民であると言わざるを得ない。

四条通りや河原町通り等の幹線においても、アーケードにより天空が遮られ道路を隔てて町並みを見るといった状況に無いこともあり、西欧に見られる様な伝統的様式の建物による町並み景観、すなわち町の中景に対する関心が全く抜け落ちている市民であると言える。

尤も建物による中景景観に対する関心を持たないのは京都市民に限らず日本の都市住民全体の傾向かも知れず、それらに比べれば近景に対する関心と「京風」といった様式意識を持ち、遠景に対しても一部信仰とも言える景観意識を持つ京都市民のほうが、景観意識を持つ市民と言えるかも知れない。

近年の京都の町並み景観が壊れてきた、

都市環境デザイン に視点をおいてみ る時、<京都から 学んだこと><京 都から学ぶべきこ と>があるか

土橋 正彦
TSUCHIHASHI MASAHIKO
㈱アーバンスタディ研究所

いや壊れてしまったといった論評をよく耳にするが、京都人にとっては伝統的様式の町家は単に過去の合理的だった建築物であり、現代の生活様式にあわせて合理的機能的に建替えているに過ぎない程度の意識であると言える。従って町の中景景観についての批判であるならば京都人にとってもともと関心の無い事柄であり、むしろ意識のなかでは京都の様式を継承しているとの思いがあるため、議論がそれ違ってくる。

インテリアやお店のディスプレイ、身の回りの工芸品、衣服、行事などの様式美が未だに健在であり、益々関心が高まっているのに対し、中景景観については景色を消さる心理的トレーニングや樹木、アーケード等により消さることで充分なのかも知れない。

京都の都心景観をコントロールする制度作りや、各地の都市景観形成制度作りにあたり、京都市民の景観に対する潜在的意識構造は大いに参考になる。

其の地の信仰的ランドマークは何か、身の回りのこだわりを持つ様式は何か、中景としての建築物を際立たせる道具立ては何か、地域の人々の持つ美意識をどの様に刺激するか、引き出すか。そして如何にどうにもならないデザインの中景景観となる建物を隠すか、意識の中から消し去るか。このような事が京都の景観意識から学んだ事である。

日本の都市景観形成のあり方を考えると、様々な局面で京都の様相がレファレンスとなる。そういった意味で、京都は景観問題の宝庫とも言え、学ぶ事は多い。

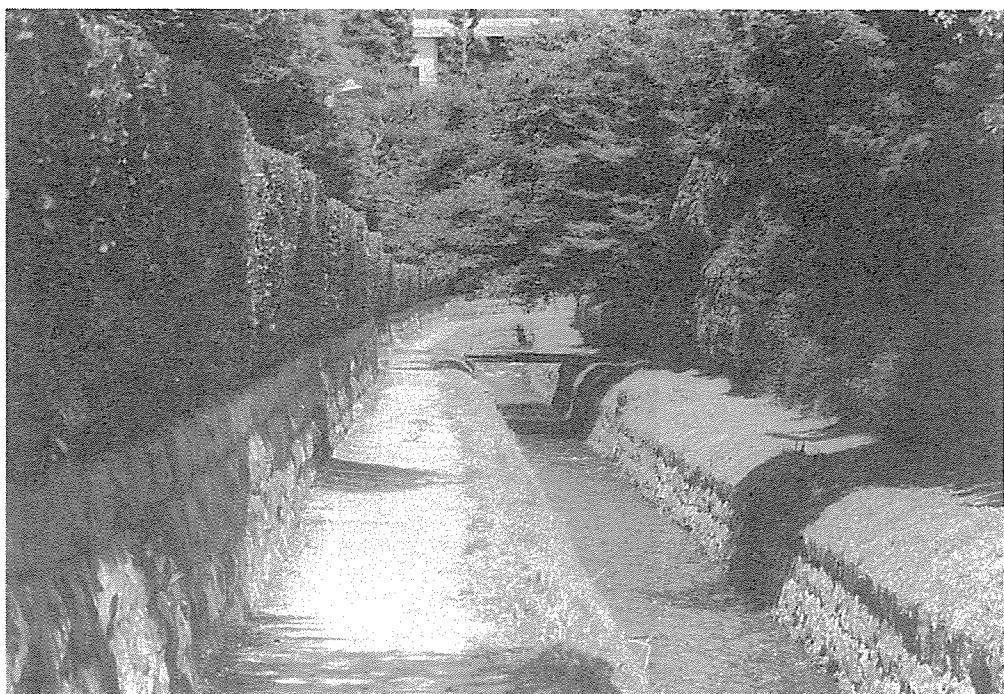
1.私にとっての京都

もう20年近く前のことになる。京都で過ごした学生の頃、自由な時間の多くを京都のまちを昼夜となく歩き回ることに費やした。私にとっての京都の原風景の大きな部分を形作っているのは、その時の体験である。

想い出すままに書き連ねてみれば、まず鴨川—賀茂川である。最近は少し変わっているが、そのころの鴨川はとてもシンプルな空間だった。そして建て込んだ家々の間をたどる町中の狭い道とは正反対に、開放感が際だった場所であった。岸に腰掛けてぼーっと時間が経つのを忘れたり、時には流れに入って水遊びを楽しんだり、荒神橋

から三条・四条あたりまで、あるいは植物園のあたりまでぶらぶらと歩いたり、川沿いの大きな木や建物に感心したり。比叡山から東山、そして北山を望む眺望も忘れることができない。鴨川は、広く横に広がった京都のまちを南北に貫くかけがえのないオープン・スペースとして思い起こされる。

学校の行き帰りに歩いた、吉田山の西の麓にひろがる下宿町も忘れない。狭い道沿いに何代も続く銭湯や定食屋が軒を連ね、そこかしこの街角の小さなお店に、そこで作られている和菓子が美しく列べられていた。猫の額のような空き地は気持ちよく植栽され、軒下には植木鉢が並ぶ。雀荘へも、植え込みの中の小径をたどってたどり着く。



水車を回していたはずだった水の流れが、造り水となって名高い庭園を潤す。南禅寺から銀閣寺に至る住宅街では、東山の緑と一体になった、極めて質の高い都市景観を楽しむことができる。（南禅寺付近）

朝の道は打ち水されていた。このまちの住まい方の伝統が、生き生きと肌に感じられた。

新しい京都もあった。櫻の並木が美しい北白川通には、既に雑誌に紹介されるようなお店がぽつぽつと出来始めていた。得体の知れない料理屋、終夜営業するジャズ喫茶、しゃれた喫茶店やフルーツパーラー、コンビニの1号店、神戸の老舗麺麭屋の出店。わずかに上り下りする北白川通の歩道には、そこが水はけの良い扇状地であるためなのか、関西では珍しいほど伸び伸びと広がった櫻の梢の下に、心地良い雰囲気が醸し出されていた。

少しお金ができると出かけたのは、昼であれば四条と御池の間、寺町から烏丸にかけてのまちなかであり、夜であれば河原町から木屋町あたりの繁華街である。前者にはビルに混じって伝統的な町屋や二条郵便局、京都文化博物館などの洋風建築が多く残り、近代以降に、京都人がまちづくりにかけた意気込みを楽しむことができた。ま

た、四条や烏丸沿いを別にして、和風・洋風を問わず、とてもヒューマンなスケールの建物が集まったまちであったように思う。四条や烏丸沿いにしても、ビルの低層部は、その裏の町並みと連続した京都らしい造りにしつらえられていた。木を使ったショーウィンドウや伝統的な産品のディスプレイ、八坂神社の御旅所、石の道標……。

後者では、一軒小路や飲食店のファサードに、ある意味では最も京都らしい伝統を感じることができた。灯のともった灯籠や門灯、飛び石、くぐり戸、窓の格子、板塀、小さな塩の山、時折見かける芸妓さん。身の丈のスケールの中に美しさ巧みに演出されていた。

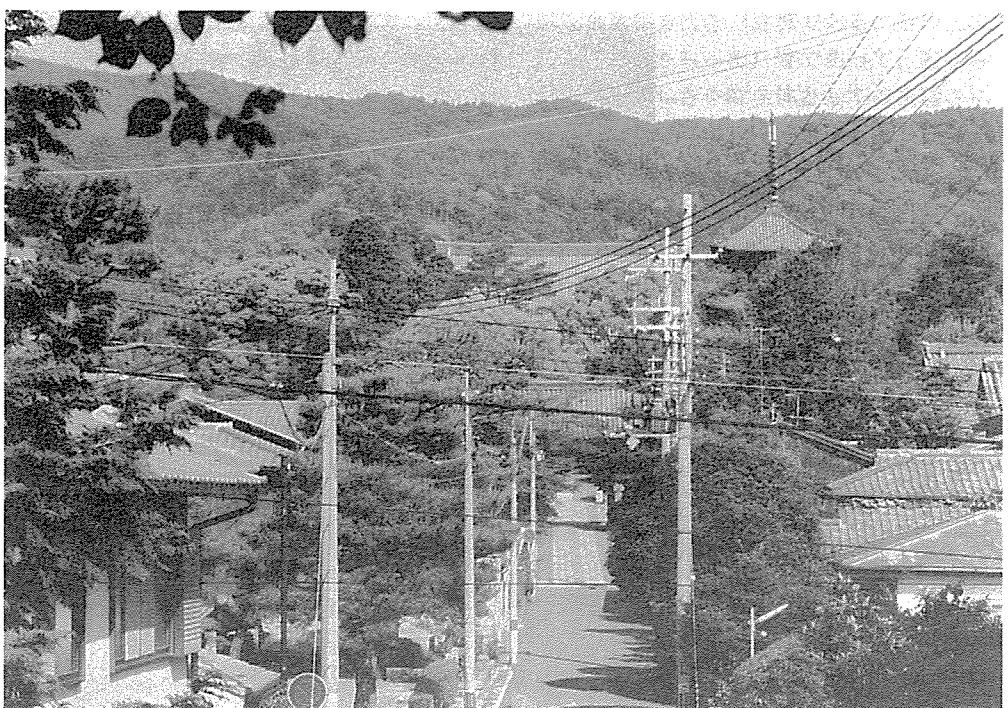
吉田山の宗忠神社から真如堂、黒谷さんにかけて、私が最も長い時間を歩き回った小径がある。このあたりは新旧大小の民家、古刹の本堂の巨大な甍屋根、二基の三重の塔、苔むした墓地、石の階段、美しく剪定された大小の庭といった個性的なエレメントが緑の丘の中にちりばめられた界隈で、



1200年かけて培われた技術の見本が、そこかしこに見られる。（黒谷）



名刹の山門の軸線を遮る巨大なビル。（南禅寺山門から）



地形を巧みに活かした寺院のサイト・プランニング。新旧の民家も、瓦を載せるという一点で調和を醸し出している。（真如堂付近）

歩き進むにつれて変化する景観のシーケンスに時間の流れを忘れてしまうような不思議な魅力を感じた。

2.京都から学んだこと

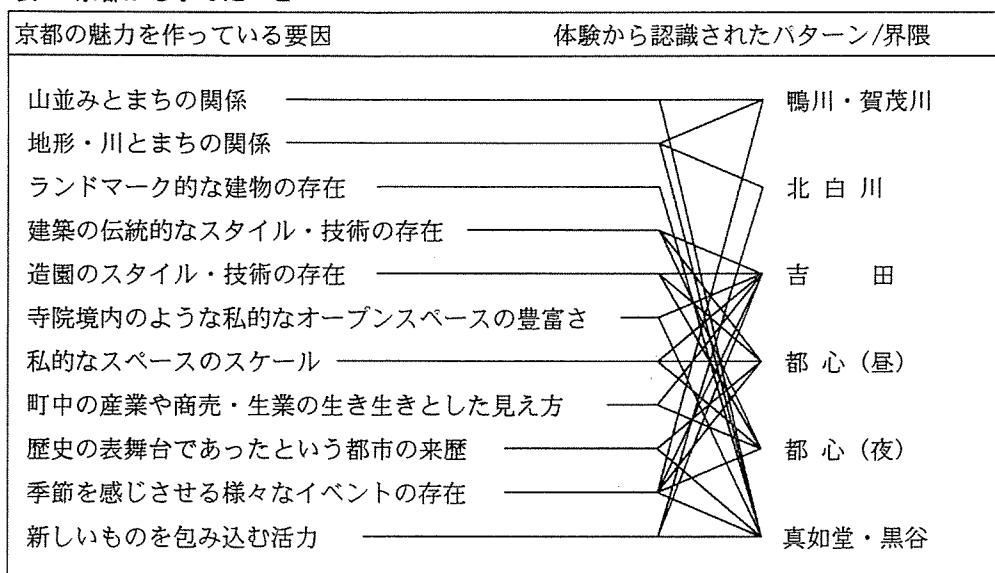
無為に文字を書き連ねてしまったが、振り返ってみて、なぜ京都のまちに心地良さを感じていたのかを考えてみたい。京都には、表に示すようなわかりやすい空間のパターンが確立している。そしてそのパターンがとても豊富である。さらに、ランドマークや歴史性がそれらのパターンを紡ぎ合わせて、京都というまちの総合的なイメージが形作られている。本、雑誌、テレビといったいろいろなメディアが、パターンを絶えず増幅するため、パターンを破壊するような起案・行為に対しては、強力にアンチテー

ゼが表明される。

京都はこういう町なのではないかと思う。

近頃の京都駅、京都ホテルといったプロジェクトのことを考えていて、ふと琵琶湖疎水のことを思い出した。琵琶湖疎水は、はじめトランスポーテーション・カナルとして計画され、のちにパワー・カナル、上水道用水、消防用水としての機能を付加された。このうちパワー・カナルにかかる計画の変遷が大変に興味深い。当初は水車を動力とする工業振興が企てられたが、後に水力発電に切り替えられると、工場が置かれるはずだった白川一帯には、疎水の水を導いて、主に小川治兵衛の手によって数多くの名庭園が営まれるようになったのである。

表 京都から学んだこと



特集

7

景観規範としての 京都

土田 旭

TSUCHIDA AKIRA
広報・出版委員長

株式会社環境研究所

都市あるいは地域の景観を語るのに、京都をよく引き合いに出す。京都における対象や場所は多くの人びとが知っていて分かりが良い上に、景観の複層性が説明しやすいからだ。

1.盆地景観

東西・南北およそ10kmに15kmの平地に4.5kmに5.2kmの格子状の道路パターンを置いた平安京のプランは、周囲の山々にほどよい囲み感をもった盆地のスケールによく合っている。王都を築くのに理屈に合った（蔵風得水の）土地を探したら、京都盆地に出会ったというべきかもしれない。その後、主として人為的理由と思われるが、市街地は鴨川をこえて東に発展し、今では盆地のほぼ全域が市街地になろうとしているが、周囲を山々に囲まれた都市のたたずまいというマクロな景観構造は今日でも何とか持ちこたえているように思う。都市設計の第一歩といるべきロケーション選定の勝

利といえる。

日々の生活と身近な山々との関係を大事にするは何も盆地に限らず、わが国の多くの都市・地域がそうである。景観論的には、まずその視覚的関係、すなわち山々の姿、スカイラインの形状、絶対的な距離と高さ、仰角などを確かめるだろう。そしてそれをより知られた関係と比定したくなる。そのとき、京都の山々はよく知られた山が多いだけに重宝なのだ。

距離で2kmから6km、比高で200mから400m、3°から5°という親しみやすい前山の奥に比高600mから800mの山々が見えてくれる。東山は市街地に近く、眺望の仰角としてもっとも効果的と思われる5°前後の山々が連なる。これよりも仰角が大きいと山ふところに抱かれた感覚が強くなる。東山の寺々はそうした場所にある。尺度といえば市街地を流れる人口河川の鴨川あるいは高瀬川もそうである。いずれも沿

川の道路あるいは床（ゆか）と家並みを含めた断面でとらえないと鴨川なり高瀬川らしくない。

2. 景観に奥行きを与える意味性

京都を景観モデルとしてとりあげる大きな理由は、さまざまなミーニングが与えられた自然的要素あるいは場所場所が単なる空間的存在以上に強調されるという点で卓越しているからでもある。歌に詠まれ、物語が語られ、行事や祭事の長年にわたる舞台となり、いたる所、いたる場所に意味が与えられてきたが、景観を構成する各要素は他の都市の同様の要素に較べ、その意味性で強じんになっている。そのうちのあるものはランドマークとなり空間座標としての力を發揮する。

ところで、歴史的出来事がミーニングを与えているものも少なくないが、京の特徴はなんといっても政治・経済とは直接関係のなかった文化が意味性を与えていていることである。これは他の、たとえば小京都といわれる都市と比較してもその密度が圧倒的に高い。

3. 季節と食物と行事、そして風景

もう一つ京で見逃せないのは、夏暑く、冬寒い盆地気候にめげず四季折々の生活を様式として確立してきたことである。日常生活はさておいて、年間を通じて行事が各場所場所でくりひろげられ、季節感のある風景が生活にリズムをつくりクローズアップ

される。この風景はその場にふさわしい食べ物と結びつき、より深い印象をもたらす。このこともまた、京都をよく題材にする。

4. 京都の町なみ

京都の伝統的な町なみもまた一つのモデルであるが、部分を切り出してみると、伝統的町なみのプロトタイプは他の都市にも数多くある。京都の場合は、通り沿いの町家が縦・横織りなしで都市の基本的組成になっている点に注目すべきだろう。それよりもいま個人的に関心を持っているのは、京都の町なみにおける堀の存在についてで、この堀を無くすとどのような町なみになるかということである。

5. 現代の京都から学ぶべきこと

それでは現代の京都に規範となりうる空間ないし空間形成システムはあるのだろうかせつかくではあるがどうもあまり思い浮かばない。京都に詳しい方に是非教わりたい。

近年たてづけの景観・美観をめぐる論争もその一つである。京都ならではの論争ともいえるが、我々からみていわば国際的な常識が教養人の多い京都では常識にならないかのようである。世界遺産という重い歴史的文化的価値と共生する日々の営みとの葛藤が間欠泉のように時々噴出するのだろうか。恐らくこのことも一つのモデルとして学ぶべきなのだろう。

らずに昔からの町並みが現在も続いている、なによりも回りの建物が視線の高さであることに非常に心地良さを感じる、またコン

京都を脱出して

大前 正則

OHMAE MASANORI
（有）藍風館

新宿、神楽坂に事務所を設け京都との二重生活を始め4年目になる、以前『東京スタイル』という本の出版に携わったときに、その本の著者から京都で生まれ育った人間にはこの地が最適であると強く薦められた。彼は東京のやはり都心で生まれ育ったが、しばらく京都で暮らしたことがある。京都が学生を中心に元気だった70年代に活躍した人々が地下に潜って今でも京都の密やかな遊びを楽しんでいるのではないかと考えていた、あいにくそういう人に出会うことなく東京に戻ることになったようだ。

神楽坂は、関東大震災でもほとんど被害を受けることなく古い町並みを残し京都によく似た入り組んだ路地や黒堀の高級料亭、花柳界、能楽堂等があり、また出版社、大手の印刷会社、書籍取次、大小の製本所があつて、昔から政治家、文学者、画家、演芸関係の人々や出版にかかわる人達がこの町に集まり賑わってきた。

位置的には東京の中心部にあるにもかかわらず、バブル経済の崩壊以後もこの町はマンションや地上げによる歯抜け状態にな



神楽坂・黒堀の料亭街



神楽坂・赤城神社大祭

ビニエンスストアではなくて様々な業種の商店が並び日曜日になると道路から車を締め出し露店が立ち、買い物客達の歩行者天国になる、夜ともなるとこの町の最も得意な時間帯となり黒塗りの国産高級車が主人を待って路上に止まり、会社帰りのサラリーマンや印刷屋、制本屋のおやじが居酒屋の前で席の空くのを待って入り口に並ぶ、パンクロックのライブハウスの前にはカラフルなヘアースタイルの若者がたむろしツインスターの前にはドレスアップをしたOLが列をつくる。秋祭になると各町内から御輿がで住人達が御輿をかつぎ商店街を練り歩く、職住が一体となった元気な町だ。

いつも京都へ帰ってくると町の活気がどんどんなくなつて行くような気がする、このままでは町家もお洒落な明治建築、歴史的習慣もなくなり、京都らしさが全て消えてしまうのではないかと強い危機感を感じる。河原町通りにはパチンコ屋が並び、辛うじて世界一大きなミュージアムショップ街、新京極は若者と観光客の人々で元気なように見える。

昨年、町屋のCD-ROMを制作するに当たつて京都の町家をじっくりと見てあるく機会を得た、様々な種類の壁、格子、瓦や窓等、今まで見慣れた風景としてしか見てこなかつた町の外観には様々な意匠が施され、その意匠の一つ一つに長い歴史のなかで人と人とのかかわりを通して創り上げてきた工夫やデザインが込められていることに驚かされ、非常に興味深いものであった。同時に

そういったデザインやアイデアをただ形として残すのだけではなくその形成の過程や考え方、現在の町並みの中に活かされるものが多くあり、学ぶべきものであることを痛感した。

最近、京都ホテル、京都駅の改築、地下鉄の東西線が開通し久しぶりにざわざわした印象を受ける、京都にも昔のざわめきが戻ればと期待する。



神楽小路の飲食街

京都はヒーリング都市か

大石 真理子
OHISHI MARIKO
(有)ジャムチ・コーポレーション

「そうだ京都へ行こう」というコマーシャルコピーは、まさに東京から見た京都像である。京都が壊れかけた私をいやしてくれるという期待が込められている。そこにはパリへ行こう、ロンドンへ行こうというときのわくわくする感じがない。新しいもの、楽しい出来事への期待がない。そうかといって強烈な個性や文化に身を置くというアグレッシブな姿勢もない。京都はヒーリング(癒し)の都市として観られているのである。

ヒーリング都市になるということは、都市として”死にかかっていく”ということを意味するように私には思える。

今、停滞が続く日本の経済・社会・文化の中で、京都は逆に新しい価値ある都市としていきしていくチャンスにいるのではないかと思う。京都は”死なないために”新しい創造の種を創っていかねばならない。しかし、いつも新しい事業は成功するとは限らない。新規事業の成功例は低い比率であるのが普通である。”死なないために”的実験プロジェクトは延々と続けられるエクササイズのようなものであると考える。

ここで私のイメージするプロジェクトアイデアをいくつか述べてみたい。いずれも京都を救うような大それた処方箋ではない。死なないためのエクササイズの一つと考えていただきたい。

1. 緑の空地：しないことをするプロジェクト

開発か保存かの二者択一でない小さな環境づくりもある。子供の減少、高齢化の進む中で小学校の廃校も相次ぐという。例えば、小学校の跡地利用は校舎の建ぺい率・容積率を保存した開発を行い、残りを緑の空地とする開発があつてもいいのではないか。もっと豊かに、もっと便利にという良いことづくめの発想から、都市の記憶をとどめるしないことをする発想へシフトすると、京都の行政ができるうるプロジェクトの幅はうんと広がるように思う。

2. まちとむらのネットワーク：自由創造京都圏

京都を考えるとき歴史的市街地を思い浮かべがちであるが、京都の力強さは京都と周辺地域の関係にあると思う。今東京に住んでいて感じるのは東京の周辺地域が面白くないということである。東京は都心を頂点にして遠くへ行くほどボテンシャルが低くなっていく。周辺地域が都市化することで東京への依存度が高まり創造力を失っていく。一方、昔から京都は周辺地域といい関

係を持ってきた。近くでは伏見、宇治、亀岡、大津、遠くでは丹波、丹後、若狭、歴史的にみればついこの間まで上賀茂、洛西、嵯峨野、鞍馬もむらであった。京都が古さだけでなく新しい魅力と創造力を持つために、文化の産地としてむらを育てていくネットワークプロジェクトがあつていい。新しいクラフト、ソフトウェア、ファンション、伝統産業、芸能、アート、学問の創造の場として、むら(比喩的なむら)が一村一芸を持つ、人々も適地適人の集まりのむら(叢)を日本や世界からつくる、そして京都を中心に自由創造圏を形成するしていく事が考えられる。

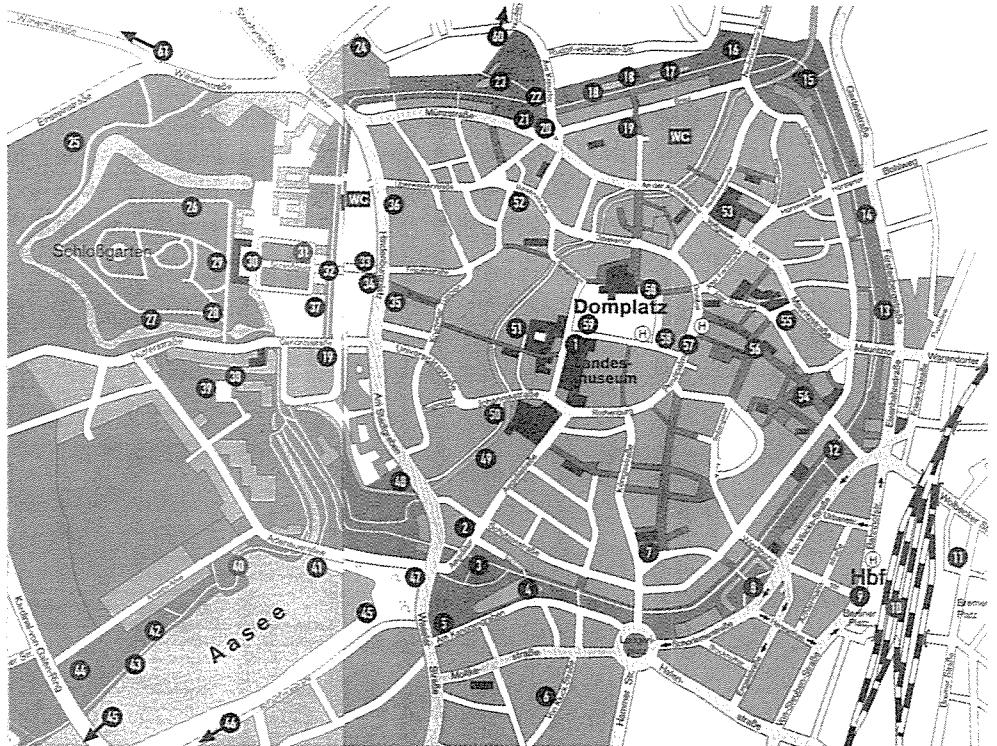
3. まちなかプロジェクト：界隈保存と周辺カルチャー

数十年前に旧遊廓の建築や祇園の色彩調査などをして以来、花街の伝統文化の在り方に興味を引かれてきた。暮らしの文化、遊びの文化、建築やインテリアの総合された伝統の深さがある。しかし、時代の趨勢の中で花街の存続も危ぶまれるようになってきたと聞く。まだ活力が十分残ってるうちに徹底的な地区保存をしてはどうだろうか。歩行者専用の地区にし、そこには完全保存された建物、ファサードを残して立て替えた建物、いくつかの建物の内側を一つにしたブロックがあつていい。そこに新しいマーチャンダイジング(商品化計画)を考えていってはどうだろうか。住宅、ブティックやギャラリー、コーヒーショップやレストラン、オフィスや工房、企業のゲストハウス、カルチャースクール、研究すればお年寄りのケアセンターだって十分可能性がある。

私にとって面白いのは、濃厚な歴史地区の縁には、世界のどの街にも新しいカルチャーゾーンができることがある。新しい音楽、面白い人が集まるカフェやバー、ギャラリーやショップ、こういうところから京都らしい若くて新しい文化が育っていくのではないか。周辺から生まれる創造パワーこそもう一つの狙いである。

4. まちづくりの企画と運営

京都には魅力的な祭りがたくさんある。古い祭りに匹敵する現代の祭りをこれから創っていくことも大切である。ここで一つの例を挙げたい。今年ドイツのミュンスター市で、6月から9月まで彫刻プロジェクトが行われた。ミュンスター市は人口26万人(うち、学生6万人)の裕福で保守的なカトリックの中都市である。ここで10年に1度彫刻展が行われる。今回は3度目であ



ミュンスター・彫刻プロジェクト案内図

る。世界から 64人のアーティストが選ばれ参加した。アーティストは都市を訪れ、都市を学び、どういう作品をどこでどう見せるかを考え創る。街中がパブリックアートの実験場となりイベントの舞台となる。アートを見に訪れた人は貸自転車に乗り街を動き回る。ここではアートと都市全体（アーバニティ）の関係、人と社会の関係こそテーマである。このプロジェクトのキュレーターのカスパー・ケニッヒ教授はミュンスターの彫刻を雪だるまのメタファーとして語った。雪だるまは誰にでもわかる集合的記憶である。雪だるまはただである。雪だるまは消えてなくなる。雪だるまが置かれる場所こそアートを置くにふさわしい場所である。実際にはアートプロジェクトには大きな予算が必要であるし、難解・不愉快を特定の人々に感じさせるものも多い。プロジェクトが終わればアート作品の多く

は街から消える。このプロジェクトは彫刻展というよりはまちづくりプロジェクトである。おまけに 4ヶ月の期間多くの観光客を呼ぶイベントでもある。都市の運営につながるこのようなソフトこそ京都にふさわしいのではないだろうか。

5.想うように創られる：私主義の京都
都市は長期的に見れば想うように創られていく。想いは市民の責任である。これだけ国際化した社会では、人と同じ、他都市と同じ想いでは意味がないであろう。他と違う”私”という個がないと難しい。そういう意味で京都は”私”が集積した”私主義の都市像を突き詰めていくべきだろう。
まちづくりは街を変え続けるプロセスそのものであり、人々とプロジェクトが一体となって時間が流れていくことだと思う。

ここで取り上げる寸評については以下の 5つの質問それぞれに 20字程度で答えてもらうように 9月初旬に依頼したものである。すぐに回答のあったものから 11月半ばのものまであり、橋に関する質問については、ややタイムラグの影響が見られる。また結果的には人によって文字数はバラバラになってしまったが、ここではそのまま掲載している。（清水）

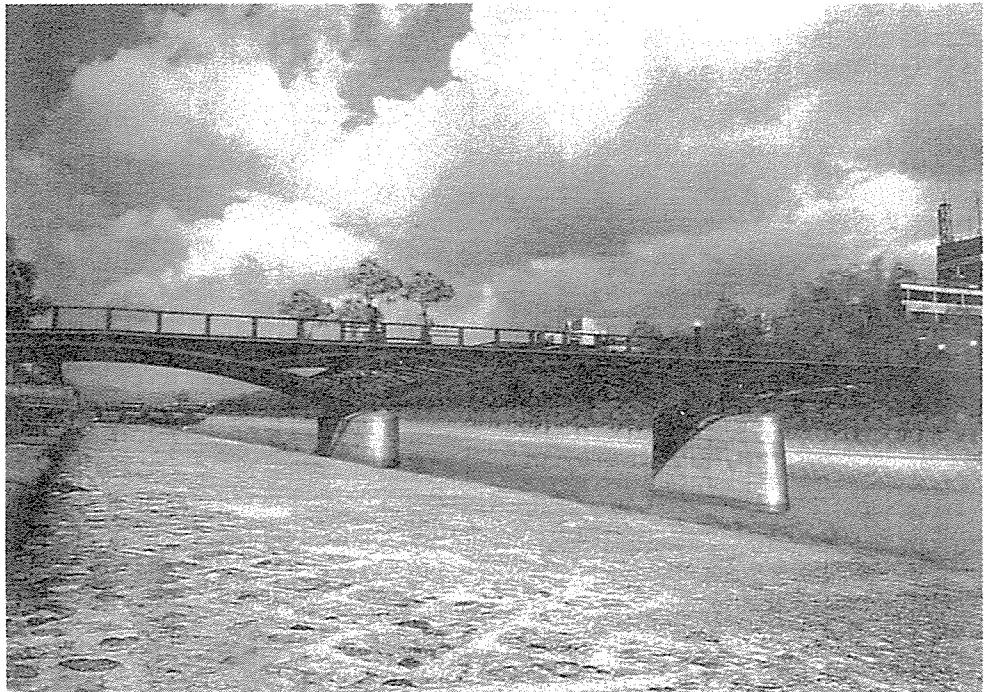
（質問）

1. 京都と自分の関係は
2. 京都で好きな場所、京都で好きな現代的プロジェクトは
3. 京都駅について
4. 鴨川歩道橋「ポン・デ・ザール（芸術橋）」について
5. 最近の京都は「はがゆい」思いをさせますか

「ポン・デ・ザール（芸術橋）」計画とは

この歩道橋計画は96年11月、榎本京都市長がシラク仏大統領から98年の「日本におけるフランス年」と、京都・パリ姉妹都市盟約締結40周年を記念する共同事業として提案を受け、調査を進めていたもので、京都市は97年8月そのイメージ図を発表した。橋は京都市の中心部、鴨川の三条～四条間に建設し、フランス・パリ市

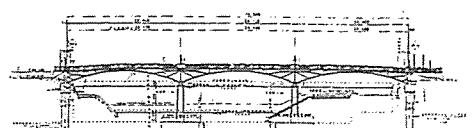
の「ポン・デ・ザール（芸術橋）」の図面をもとにデザインしたもので、2基の橋脚、3つのアーチからなり、全長73m、幅10m。7つのアーチを持つ本家ポン・デ・ザール（全長155m）のほぼ半分の規模となる。計画発表後、市民から様々な論議がおこっているが、京都市は来年7月着工をめざしている。



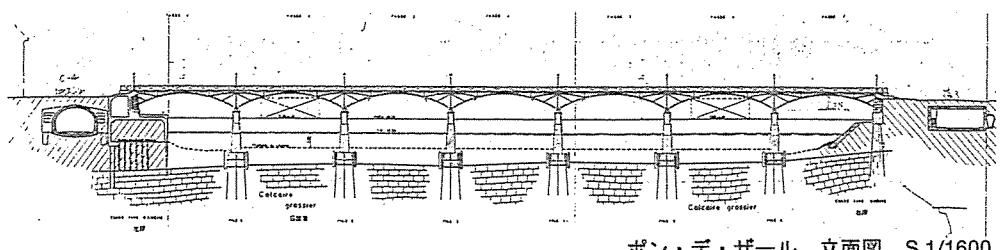
完成予想図（高水敷より）



完成予想図（橋上より東山）



鴨川歩道橋 立面図 S.1/1600



ポン・デ・ザール 立面図 S.1/1600

飯田 昭（弁護士）

- 1.都心部で生まれ育つ。弁護士としてまちづくり、景観問題に関わる。
- 2.清水寺周辺。寺社仏閣を舞台にした音楽やアートは面白いと思う。
- 3.市街地を南北に分断し、「南」の住民か

ら三山の眺望を奪う巨大な壁。

- 4.パリに相合うのであり、鴨川や先斗町の歴史的景観とはあまりにも不調和。
- 5.歴史都市としての保全、再生の努力を怠り、目先の薄っぺらな「経済」に流されている。

伊住政和（裏千家、茶美会グループ）

- 1.生まれも育ちも京都です（もっとも400年前から！）
- 2.鴨川、船岡山 現代的なところ…ありません。
- 3.ウーン…、好き嫌いより建築コンペの決めかたが問題だった。
- 4.しりませんでした！ パリのうつしですか？ 景観的には…？
- 5.「はがゆい」の通り越しています。

大石真理子（ジャムチ・コーポレーション）

- 1.私が学んだところ。
- 2.好きな場所は私的すぎてお答えできません。好きなプロジェクトは地球温暖化防止京都会議。
- 3.どんどんこのような新しく質の高い建築ができればよい。コンペ選考過程は世界の恥だと思う。
- 4.三条～四条間にという発想が間違い。
もっと下流がいい。
- 5.そう感じたことはない。

大前正則（出版社「藍風館」）

- 1.自分自身の軸である
- 2.河原町御池界隈
- 3.見て見ると予想以上に良い
- 4.鴨川がどう見えるか楽しみである。
- 5.いつもはがゆい思いをしている。

梶田真章（法然院貫主）

- 1.生まれ育ったご縁を喜び続けたいと思います。
- 2.将軍塚。曼殊院。京都フランス音楽アカデミー。
- 3.外観がすっきりしていません。駅前に森を。
- 4.木製の旧三条大橋の復元なら理解できます。
- 5.自分自身に、はがゆい思いをしています。

清水泰博（SESTA DESIGN）

- 1.生まれ育ち住む好きな街だが、関わりはあまり持てないのが現実。
- 2.人の適度にいる（観光シーズンでない）東山界隈。生活感のある（人の住んでいる）洛中。
- 3.京都初の東京的総合アミューズメント施設。出来てみて結果オーライ的な反応が気になる。
- 4.場所性の問題が一番、それにしてもなぜここまで強行しようとするのか。
- 5.全てに歯車がくるってしまったような感じ。

マーク・ピーター・キーン（造園建築家）

- 1.京都の庭園と自然に、教えてもらっている。
- 2.路地、坪庭等、京都にこそある空間。
- 3.南北連続が必要なのに、壁をつくった。
- 4.パリには、「渡月橋」を作らないでしょう。
- 5.毎日、心の中で泣いています。

村野博司（京都工芸繊維大学）

- 1.京都の郊外で育ち、大学時代を京都で送り、戻って10年。
- 2.古くは桂離宮、今は佳水園（都ホテル内）とタイムズ。
- 3.京都に建つものとしては刺激にはなるが、作りすぎ。
- 4.先斗町とは合わせず、国際文化交流への誤解。
- 5.日々「はがゆい」思いの連続。

杉本節子（財）奈良屋記念杉本家保存会）

- 1.生地。生涯の居場所。
- 2.京都御苑。鴨川に架かる松原橋（からの北方向の眺め）。京都で好きな現代的プロジェクト一特になし。
- 3.京都に似合いません。
- 4.姉妹都市盟約締結40周年記念事業とする発想にはうなづけない。なぜ、京都独自の事業として行わないのか。

田端 修（大阪芸術大学）

- 1.下京生れ、中京育ちで、40歳以降は大阪在住。
- 2.わたしがマチナカと呼んでいる旧市街地一帯
- 3.清水寺境内の雰囲気が漂う中身。外見は？？？
- 4.土木的施設の＜デザイン＞にはコンセンサスを得るしきみが必要である。
- 5.京都のもつ影響力への確信が足りないとは思う。

土田 旭（都市環境研究所）

- 1.ごく普通の日本人ないしは建築、街好き人間としての関係。
- 2.とくにどこということもないが、あえていえば京都三山の山裾。現代的プロジェクトで好きなもの、ピンと来ず。
- 3.京都の空間構造の一部（重要拠点）としては表現に力強さがないのではないか。
- 4.先斗町と花見小路を結ぶ橋がかかるのかな？ところで足がかりはどうなるのだろうか。御池通りのアート類（？）の設置など芸術づいているようだが、何か京都のイメージとはチグハグな感じがする。

5.それほど自意識過剰になることはないのでは……。はがゆい思いはそこら中でしているので。

この設問に該当するかどうかは別として、20字を大幅にこえて一言。

京都の未来についての国際コンペの仰々しい割に、賞金の少ないのに驚いた。あれだけの宣伝と経費をかけるのであれば（かけていると推測するが）、ヴィジョン、アイディア、ノウハウそのものの提供を受ける代償としての賞金と最優秀案は例えば1億円に事業2000万円といった額になつてもおかしくないと思う。国際コンペそのものを単なる京都の広宣事業としかとらえていないのではないか。

土橋正彦（アーバンスタディ研究所）

1.70年代の後半、20才を挟む5年間を過ごしたまち。

2.好きな場所　強いて選べば吉田山、真如堂から黒谷にかけての界限。

好きな現代的プロジェクト　“現代的”ではありませんが梅小路公園。

3.駅単体としてはおもしろいと思います。
しかし、堀を巡らしたかのように、まちから浮き上がって閉じた建物です。

4.無理矢理似せているために、道路に架けられた横断歩道橋と同じように見えます。
パリの人は、セーヌ川に渡月橋のコピーは受けさせないでしょう。

5.全てを固定しろという意味では決してないのですが、京都に関わるひとは、京都であることの意味を、よく見つめ直す必要があると思います。

道家駿太郎（岐阜女子大学）

1.30年前に東京から移り、以後京都の地域計画コンサルとして住み着く。

2.哲学の道（家のそば）、大文字山。現代的プロジェクト：コンサートホール、桂坂

3.アトリューム空間はけっこう刺激的、全体ボリュームは企画の問題

4.文化首都を標榜する京都がここまで落ちたか。風致行政のプライドは何処に

西 斗志夫（住宅都市整備公団）

1.6年前から市民。まれに大規模計画に関連。

2.北大路以北の賀茂川。高瀬川、先斗町、東山。

3.敷地主義の典型。特に南の住民には非礼。

4.発想が貧困。似合う場所は、他にあるはず。

5.御池通アート構想等には、恐怖を感じる。

堀場 厚（堀場製作所）

1.生まれ育った土地、また仕事の拠点でもある土地で、最も好きな町です。

2.銀閣寺、またその界限の疎水近辺。現代的なプロジェクトでは、京都駅の内部が気に入っています。

3.他には見られない、ダイナミックな内部構造となっていて、感心しております。

4.今後フランスとの、友好関係を重んじていくという考えであれば、大変良いのでは、と思います。

5.優れたシーズを持っているにも関わらず、アウトプットがうまく出来ていないようと思われ、大変はがゆく思っています。

山崎正史（立命館大学）

1.京都は懐かしくもあり、また少し疎遠な私の故郷。京都に生まれたが「京都人」ではない。

2.南禅寺から銀閣寺へかけての東山山麓。嵯峨野。

3.大規模主義は京都の魅力を損なうと思う。京都を南北に分断したことも遺憾。

4.公共的景観は民主的手続き、住民参加で形成すべき。パリの持ち込みは京都のイメージを混乱させる。しかし、ポン・デ・ザールに匹敵する美橋の建設は日本の土木界の現状では極めて困難と危惧される。

E.ヨリッセン（京都大学・比較文化・文学）

1.偶然そこで生まれた出身地と異なって、自分で選んだ存在地だから、私にとって京都は一つの可能性である。

2.春雨の嵐山、秋月の御室、梅雨の京都の庭。ときには古くさいプロジェクトでもよいではないでしょうか。

3.京都の破壊の象徴である。なぜ今現在に京都の南と北をもう一度切る必要があったか、と考えてしまう。

4.コメントになれるほど、十分知識をもっていない。

5.車は多すぎ、市内の建物は高過ぎる。

吉原和恵（現代アート作家）

1.父も母も私も、生れてずっと暮らしている所。

2.京都で好きな場所は町屋、京都御所、三条大橋、円山公園。好きな現代的プロジェクトは無し。

3.シンプルな京都独特の新しいセンスが足りない。

4.反対です。風景に融合する橋が望ましい。

5.普遍なものが植え、京都の味を薄めている。

■北陸ブロック

樋口 忠彦
HIGUCHI TADAHIKO
北陸ブロック幹事

新潟大学

【報告者】
黒野 弘靖
KURONO HIROYASU
新潟大学大学院

1997年7月19日、20日におこなわれた、北陸ブロック総会（会場；新潟大学）の報告をしたい。そこでは、10名の会員による発表会と、活動計画を話し合う場がもたらされた。まず、発表会の内容から順に報告する。

1. 「富山市の都心地区整備構想と再開発事業」 稲葉 実 / 柳原 恭順

発表者が実際に携わった計画の紹介である。まず、都心形成史と現在の状況の説明がなされた。

富山市には二つの市街地（富山駅北地区と城址付近）があり、その二つをどう結ぶかが問題になってきた。

大正から昭和にかけて、神通川の付け替えが行われ、廃川地に工業施設が建設された。戦災復興として、広幅員、格子状の道路がひかれ、市役所など公共施設は、駅と城跡付近の間に集中した。市街地の西側には、神通川に沿って運河が掘られている。現在の都市計画として、「富山駅北地区市街地総合再生基本計画」、「富山市中心市街地地区市街地総合再生基本計画」の二つがある。そこでは、運河を親水公園として整備する構想（廃川地に作られた6mブルバールにつなげる構想）、廃川地にマンションと散策路の整備する計画、古くからの商店街を6mに拡幅する計画、戦災復興道路を、シンボル通りとしての整備する計画が進められている。

これに対して、1. 戦災復興したところをもう再開発するのか、2. 計画案のホテルの高さは問題にならなかったのか、という質疑が出された。1. には、古くからの中心市街地は外来者が減っているという理由が、2. には、景観的には全く問題とならなかったという状況が説明された。なお、富山市の土地がまとまっていることによる開発の可能性の高さが指摘された。

2. 「浅野川と犀川・親水護岸の在り方」

上坂 達郎

浅野川と犀川の親水護岸の現状から、その問題点が指摘された。

まず、犀川については、工事期間を短くするため、二次製品ブロックを使用した階段護岸が、斜めに貼られたところで滑る危険性がある。また、浅野川については、工事期間短縮のため、工場で貼ったものを敷き詰めた結果、犀川と同じような階段ができている。浅野大橋付近の迫り出したステージは、川の風景からみると、もとのスケールに合っていない。親水護岸自体、その場所に本当に必要かを考えなければならぬ。

い。また、その場所だけでなく、広い範囲で風景的に考える必要がある。

これに対して、1. 階段護岸は役所側から依頼されるのか、2. バリアフリーへの対応は、という質問が出され、1. には、役所からポイントで違うコンサルに依頼されており、担当者の好みで変わったりすること、2. には、必要性を疑うところまで長いスロープがついている、という回答が示された。

そのほか、行き当たりばったりの整備では、川がかわいそうだという指摘もあった。

3. 「砺波散居村における居住システムの分析」 黒野 弘靖

砺波平野の村落の中から「境界不明確な散村」をとりあげ、庄川町<天正>のケース・スタディをとおして、散村全般におよぶ構成原理を把握することを目的とした。このため水系、ミチ、近隣関係、屋敷構えとお互いの対応関係に注目し、これを耕地整理の前後で比較した。これにより以前のしくみを浮かび上がらせ、たんにランダムに散っているように見える屋敷同士につながりがあること、すなわち、耕地が屋敷と一体となり、ミチや水路が生活空間として有機的なつながりを持ち、屋敷と間取りが村落の秩序を支えていたことが示された。

これに対して、1. 家の建て替えなどが行われていっても、今の散居村の形態が残っていくと思うか、2. 散居村の影響で、耕地整備のシステムが他と変わったことはないか、3. 農家の形態が変化しているが、今の方が農業を維持しやすいのか、という質問が出された。

→1. には、土地利用は変わらないので残る。屋敷林を保存する動きもある、2. には、基本的に全国一律の区画を踏襲している。3. には、生産性では現在の方が圧倒的に良い。ただ、「集まって住む」ということにに関する配慮があつてもよかったですという回答がなされた。

4. 「“らしさ”の再考」 小泉 晋

何が「金沢らしい」のかについての分析が示された。

まず、町を金沢城、武家屋敷、町家、足軽、寺社にわけ、城周辺には役所や、多くの文学作品に採り上げられる通りがあること、武家屋敷には、緑のキャパシティが大きく、インナシティの公園緑地としての機能していること、庭には前庭、中庭、セドがあり、セド庭には自給自足のための野菜や樹木があったこと、町家には平入り、格

子、人見戸と呼ばれる上下する柱間の装置があったこと、街路には、小路、行き止まり、折れ曲がった道、三叉路が多い。

現在、「らしさ」が曖昧なまま整備が進められているので、一般の人にアンケートを実施した。その結果をデータベースにし、具体的に「らしさ」を考えていきたい。

これに対して、江戸時代の金沢らしさの原点とすると、明治以降の金沢はどうなるのかといった質問が出され、まず根から考えようとしたという意図が示された。

5. 「ギリシア・キクラデス諸島にみる石造建築群がつくる集落景観～ケーススタディ／ミコノス島とサントリニ島の比較」佐藤 和裕

サントリニ島は、今もヴェネチア風デザインが残る観光地である。白い色は、ペストが流行したときに、衛生的なことを考えて石灰を塗ったことによる。キャプテンの家とクルーの家の二つがあり、崖のスカイラインにキャプテンハウスが並び、そのまま横穴にクルーの家が続いている。地震で一度廃墟となつたが、民宿、レストランなどをはじめて復活した。横穴の中は、表面と奥の光の差が大きい。精神的なものも反映している。

ミコノス島は、テーマパーク的な感じではなく、観光客が多くても自分達の生活を続けている。教会には人が集まるものと家族教会がある。外階段ー内部のプライバシーを外に見せている。内部は非常に暗く、チープなつくりとなっている。

これに対して、1. 上下水はどうなっているのか、2. ミコノスの外階段は、という質問が出された。

1. には、上水は雨水にたよること、下水は放りっぱなしであること、2. には、1階がファミリールームで外を通って個室へ行くという回答が出された。

6. 「NADAYA PARK 環境グラフィック計画」島津 勝弘

計画の紹介がさなれた。

大型百貨店が立ち並ぶ通りの裏の商店街に立地する。名古屋は大きな箱ものを建ててもうまく行かなかったが、オープンしてみると予想に反して長蛇の列ができた。バル期に設計されたため、予算がどんどん削られ、コスト削減のために排気塔をサイン塔に利用した。行政と発注者側の意見の相違の中で、その町に合ったものを何か出していきたい。

これに対して、行政は直接事務所に発注できないので、ゼネコンと契約をしている、

土木では、デザインに対する報酬がない、といった点が議論された。

7. 「高校生への環境教育」高橋 宏子

子供達は自分達の環境に対して受け身であり、意識が薄い。そこで「周辺のパーツを組み合わせて、大きな視野でみられるようになる。」ことが大切と考えている。まず、まちの観察により、子供達のものの見方、個性が分かる。ものを数値的に組み立てる力は弱いが、感性は良い。ここでものを細かく見る力をつける。つぎに、高田公園の測量とリーデザインをおこなった。公園で遊びながら寸法をとり、体で大きさを体験する。大きな土木工事もなしで、公園を変える試みをした。大きな空間でのコーディネイトができない。書いてみると大きさが崩れる。さらにまちづくりのプランニングを前提とし、全員が違うテーマを決めてどうしたいか考えた。提案理由がはっきりしているものを重視した。

これに対しては、1. 最初に実習をやって、その後で本を読まなければ生徒はついてこないという経験、2. 金沢でサマースクールとして、金沢城跡地をどうするか、親子セミナーが実施された経緯、市民参加のまちづくりを子供達に適用してはどうかという提案、が示された。

8. 「まちなみの近代化について一港町にいがたを対象にして」 樋口 忠彦

それぞれの町の都市形成史を把握しないでまちづくりをしているという現状があるので、新潟の都市形成史を分析した。・明治29年新潟柵谷小路における建築物の立地状況をみると、角地型建築が見られる。大正14年の大規模建築の立地をみると、砂丘地帯に学校建築が展開し、奉行所が市役所や警察にかわり、柵谷小路という新しい軸線に対して正面性を持った建築となった。昭和18年白山地区における公共建築の立地状況をみると、地形の高低差を利用した建物の配置（旭町地区）：県都の顔を作り出している。

それぞれの時代、場所でそれなりに顔を作ろうとしていた。歴史的文脈の中で現在の建物がどうなっているのか、また昔はどうだったのかを把握できた。

これに対しては、以下のような質疑応答があった。

・1. 白山神社の由来は何か、2. 市民文化会館の敷地について、3. 銀行が取り壊された時期についての質問があった。1. には白山島に位置したこと、2. には、信濃川の埋め立て地であること、3. には、ほとんど戦

後で、あるとの回答がなされた。

9. 「池の藻に関する事例報告」水野 一郎

最近流行の、植物や魚類を飼育しない池を、いかにしてきれいに保つかについての、実践的試みが報告された。井戸の水を使用した3つの事例が報告された。

①金沢工業大学の池は、井戸水を循環。薬剤を入れて濾過し、きれいに保っている。夏にはプール用の錠剤を使用している。金魚は5秒で浮いてくる。人間にとっても危険。
②獅子ワールド館の池は、回廊の部分からオーバーフローさせている。屋根の雪を溶かす役割もある。清流のイメージから割りぐり石がしいてあるため、藻が生えない。
(石がしいてあるので、落ち葉や泥がたまっていて有機物が多い。)
③金沢市民芸術村の池は、井戸から水を流しっぱなしにし、オーバーフローして捨てている(換水式)。ゆっくりした流れがある。薬剤は使用していない。特に水がたまっているところに藻が発生する。

これに対して、1. 水を流しっぱなしにするのは、資源の無駄ではないか、2. 建築や美学の再検討はしないのか、3. 堀の浄化のように水を対流させてはどうか、といった質疑が出された。1.には、地下水の一番高い水脈に捨てているので、問題ない。2.には、日本庭園に逃げ込みたくない、3.には、オゾン方式よりももっとCOD少なく

しなくてはならない、という回答がなされた。なお、水はH2Oという概念にとらわれすぎている。その土地々々の水を考える必要があるという意見も出された。

10. 「雪の可能性—雪国生活研究所の実験」

横山裕

雪を楽しむというスタンスで考えられた、雪国のデザイン的な取り組みが紹介された。住んでいる人がどうしていくか考えるため、雪をエネルギー・ランドスケープとして使用する試みがなされている。昔から使われていた雪室を再現する。山形の舟形町に例があるが、公共施設では日本初の試みといえる。雪をため夏場に氷として使用することにより、7、8月の電力消費をサポートする。そのためには1.5メートルの積雪が必要となる。安塚町の雪国生活研究所として、まもなく建設工事が始まる。冬、夏、中間期の3つに分けてシステムを考えていく。建設後は、周辺の修景もしていきたい。

これに対して、1. 雪の入れ方、2. 湿気は問題ないのかといった質問が出された。1.には、当初は上から入れようと考えていたが、屋根の雪だけでは足りないので駐車場を除雪したものを横から入れる。機械除雪なので、労力は今までと変わらない。2.には、0°C100%の空気に外気を入れて調和している。という回答が示された。

■北海道ブロック

山崎 正弘

YAMAZAKI MASAHIRO
北海道ブロック幹事

(株) HAU計画設計

ブロックJUDI in旭川

- ・11月1日(土)北海道ブロックのJUDIを旭川市で行った。
- ・札幌以外の都市でのJUDIは小樽に次いで2度目で、今年になってからは初めてのことである。事務局として準備していたのはJUDI会員旭川在住の後藤純児さんと会員外で後藤さんと同じ旭川市の職員である新野さん、東さん、内田さんの3人。
- ・旭川の集合場所に集ったのは、後藤さんを含め会員7人、会員の代理2人、会員外4人の計13人、旭川のこの日の天気予報は午前中は雪、午後からは陽がさすとのことだった。

旭川駅周辺開発地区ウォッチング

- ・駅前のホテルの屋上から特別の許可をもらって開発地区全体を展望。忠別川沿いに残された地域一体には都心のゴチャゴチャを忘れさせてくれる90ha弱の自然が広がっていた。
- ・平成4年度からスタートした計画は加藤源さんのトータルコーディネートのもと

除々に進んでいて、今年度は一部樹木の冬期移植を行い、今後15年以上はかかる長期戦となる。

- ・敷地の中には100年前に建てられたレンガ造の旧国鉄整備場が残り「山ナラシ」の樹林帯がゆらいでいた。
- ・1時間30分ほどのウォッチングはナナカマドの赤い実と晩秋にしてはめずらしいおだやかな陽の光に包まれて身も心も洗い清められたような気持ちになった。
- ・また旭川市のカヌークラブの人が川くだりを楽しむ忠別川沿には、砂の河原も残り、参加者みなしばし童心にかえっていた。

意見交換会

- ・ウォッチングが終る頃、ポツリポツリと雨が降り出しきたが、運よく街中の後藤さんが用意してくれた会議室に到着し話がはじまった。
- ・最初の話題は見てきたばかりの敷地と計画案に集中。忠別川の取り込み方や、買い物公園との関係。市民参加の方法や地方都市の活性化、樹木の移植方法などな

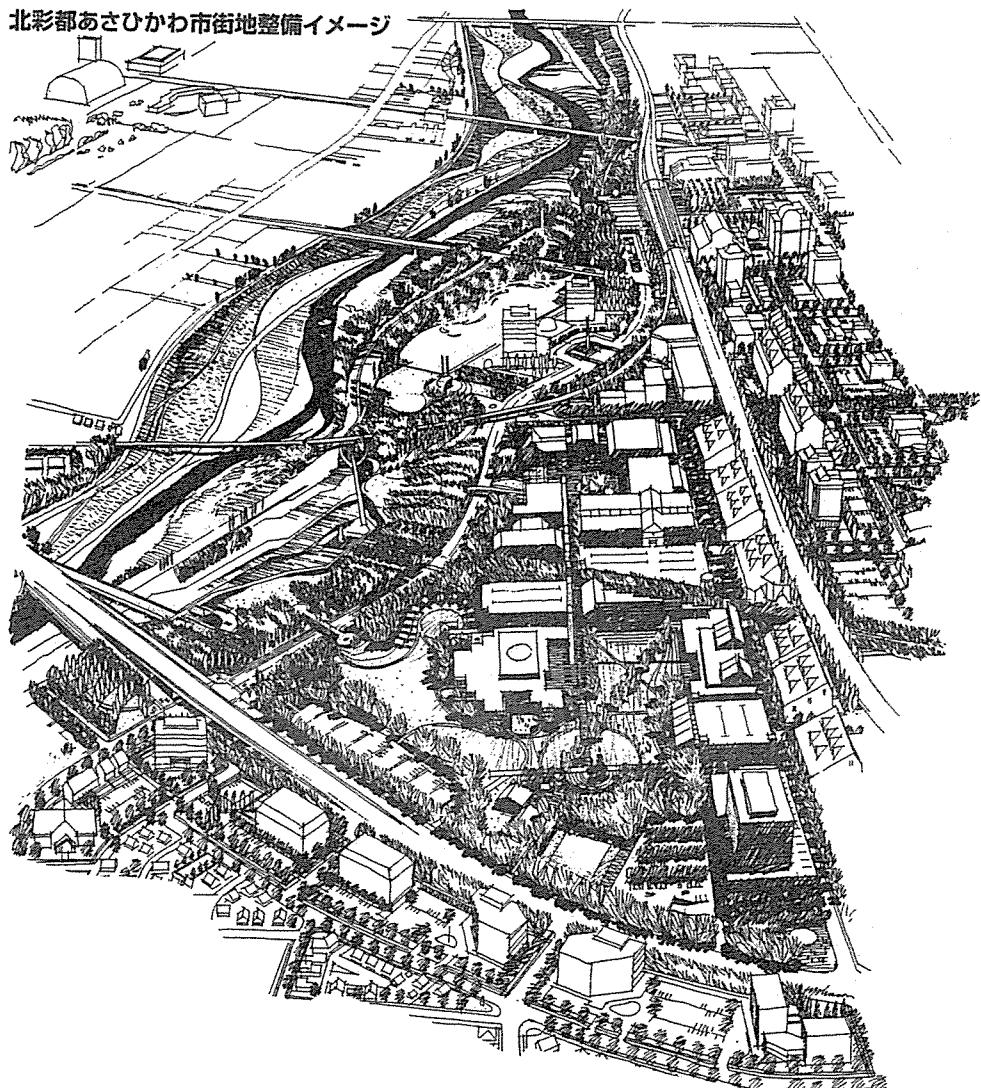
ど、巾広く意見が出された。

- ・いずれにせよ、このプロジェクトは旭川という地方都市を舞台にくり広げられる雄大な国際的規模をもつ計画であり、21世紀の幕開けをかざるにふさわしい内容をもっていると思った。
- ・次に「よい都市デザインを実現するための行政の役割」について、各人が用意してきたA4版1枚のペーパーをもとに発言した。この内容についてはいずれ整理してブロックで活用したいと考えている。

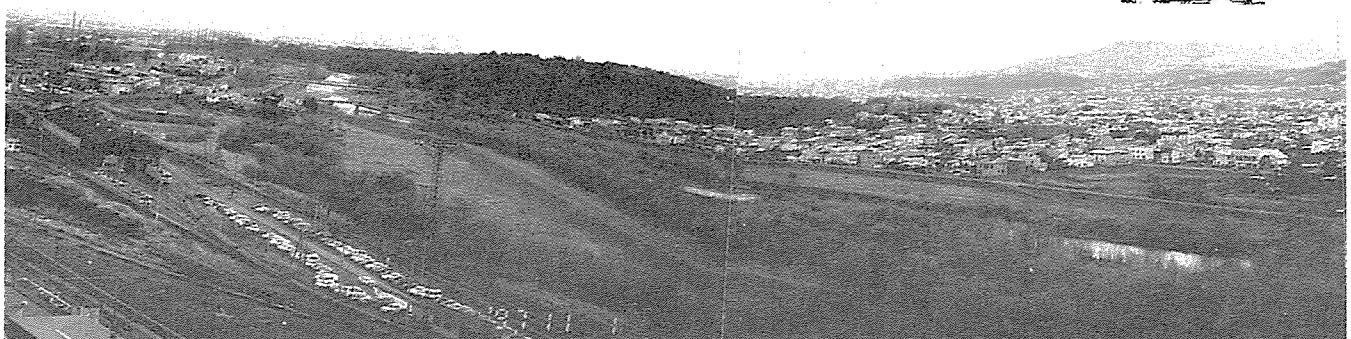
フィンランド展と懇親会

- ・旭川でちょうど始まったばかりのフィンランド展は、懇親会場の中の古いレンガ造を残した一画だった。

北彩都あさひかわ市街地整備イメージ



敷地遠景



- ・北欧フィンランドから送られてきた多くのパネルは、どれも一見に値するものばかりで思わず会場で売っていた「ヘルシンキ／森と生きる都市」の本を買ってしまった。
- ・こうした北欧の都市の展覧会は北海道だけでなく全国の会員にも見てもらいたいものだと思った。
- ・最後はおまちかねの地ビールを片手に懇親会を行った。
- ・4種類の地ビールを飲み分けて、全員ニコニコ顔で話に花がさいた。
- ・旭川でのブロック会議は後藤さんをはじめとする旭川在住の方々のご苦労のおかげで有意義に終ることができた。

■四国ブロック

大西 泰弘
ONISHI YASUHIRO
四国ブロック幹事
(有)MO環境設計

◇丸亀城築城400年記念まちづくりフォーラム「新しい城下町・丸亀を考える」

10月4日（土）、香川県丸亀市丸亀市民会館にて、JUDI四国ブロック主催、香川県建築士会と丸亀市商業振興協議会の協力で公開フォーラムを開催し、JUDI会員の他、行政、各種団体、丸亀市民など103名の参加があった。

丸亀城が築城400年を迎えるにあたり、市では各種催しが開催され城や城下町が注目されているこの機会に、空洞化が進む、まちの顔であるべき中心市街地（旧城下町）のこれからそのためのヒントを探るといった内容で話し合った。

フォーラムは、地元会員や関係団体からの現況報告の後、四国4県の会員などからなるパネラーによる意見交換と会場参加者に対する「うちわ（旗）上げアンケート」を交えながらすすめた。

パネラーからは次のような意見・提言があった。

- ・駅前の美術館と城下町の面影を残す丸亀は、女性が一人でも安心してのんびり歩けるまちであり、この歩けるまちを大切にしたい。

- ・流行を追っている専門家（プランナー）まかせにすることで、どこでも同じ規格品のまちになってしまっているのではないか。

いか。

- ・行政側は時間がたっても魅力を失わず輝いている公共建築をつくって欲しい。
- ・都市は、空間的な存在である一方で、過去という膨大な歴史を持った時間的な存在であり、新しい城下町ということについては歴史的な存在としての丸亀のまちを考えることでないか。
- ・レトロファーチャシティプランの提案：昔持っていた懐かしい良さをどう未来に展開するか、歴史資産をもつまちでしかできないこと、丸亀はこんなことをコンセプトにできるまち。
- ・まちは記憶の器、新旧の混在がまちの懐の深さ、魅力であり、そのためのリフォーム型のまちづくりを考えよう。
- ・持続可能なまちをどう考えるのか、思いつきだけの行為や不満がある部分だけ変えたのでは将来の人のためにまちを変えることにはならない。自動車に依存したまちは長くは残らないであろう。大規模店は都心につくって公共交通や自転車を生かしてコンパクトに住むといったまちづくりを考えてはどうか。など

このフォーラムに関心のある方は、会議記録が近日中にできあがるので四国ブロック事務局まで連絡を。実費にて送付予定。

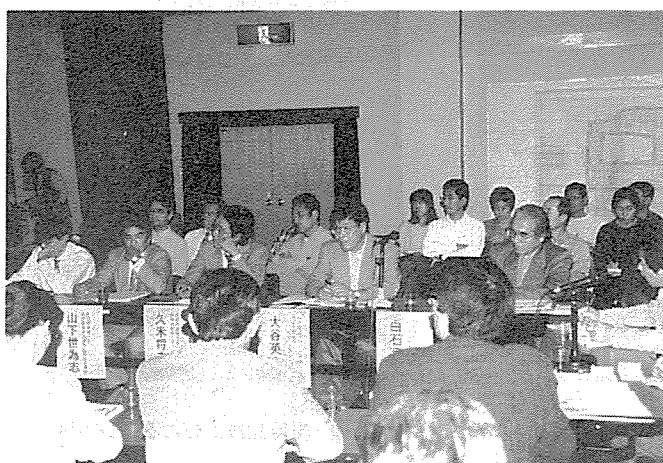


写真-1 パネラーを囲む参加者

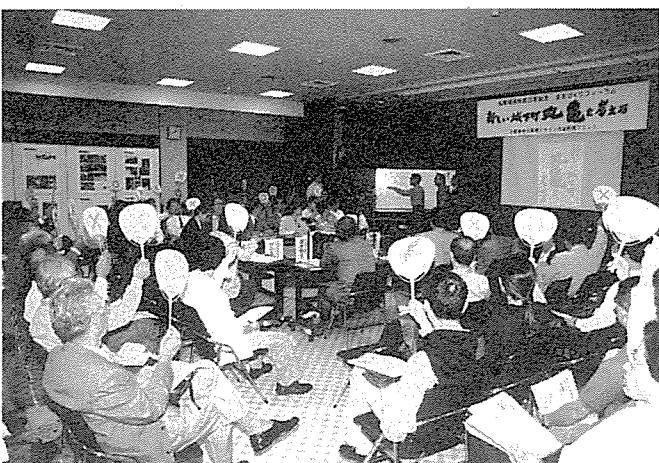


写真-2 うちわ上げアンケート

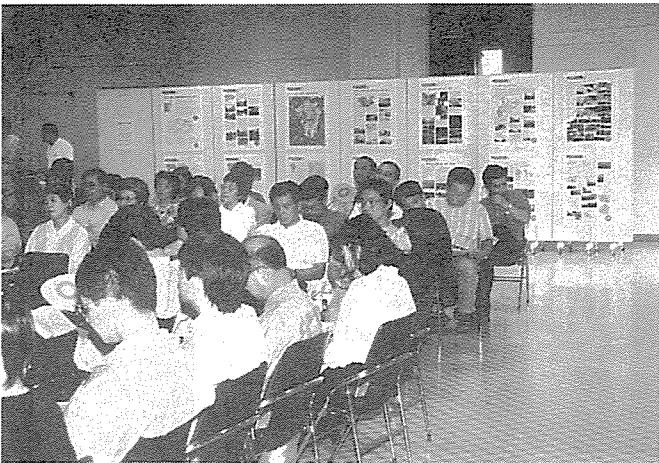


写真-3 会場内のJUDIパネル展

◇別子はな街道をゆく

昨年JUDI四国ブロック主催で開催した「新居浜市見学会／企業城下町・新居浜の都市変遷をみる」に引き続き、今回は元禄4年（1691年）に銅山が開坑し明治32年（1899年）頃までその中心として栄えた「別子銅山の源流（住友のインカ）を訪ねる」といった体力の求められる企画となった。

11月1日（土）10時、別子銅山記念館に集合し、記念館に展示の模型でこれからのコースを確認したうえで別子山村へ向かう。

見学対象は、高低差700m程の谷間にあった鉱山のまちの跡で目的地の頂上は標高約1,300m、ここはかつて愛媛県第2（当時の人口1万数千人、現在の別子山村の人口300人弱）のまちがあり、2,000人収容の劇場、小学校、酒造場まであった。水害や火災といった多くの災害を経た今もその痕跡を残している。

四国4県の会員などの他、兵庫県からも含め20名の参加があった。

当日は昨夜の風雨も止み雲一つない快晴、昼食のにぎりめしを受け取り、別子山村役

場の情熱的山男・福本成臣氏のガイドで、紅葉の始まりかけた旧別子銅山跡へ入る。山道筋に残る当時の施設の痕跡を見学しながら八分ほど登ったところあたりから、谷の中央あたりに、1694年の大火の132人の犠牲者の墓地である蘭塔場跡が見え始める。誰もが感動する眺めであろう。特に環境芸術や風景アートに興味がある人は是非訪れるべき場所である。

午前11時に登りはじめ登山口に戻ったのは午後3時、心地よい疲労感を感じながら宿舎となる別子山・筏津山荘へ向かう。

夜は、別子山特産の川魚としし鍋、各県から持ち寄った地酒で別子山の人たちと懇談、会は遅くまで盛り上がった。

翌日は、別子山村から全長65Kmのドライブコース「別子はな街道」にそって、別子山村の公共施設や建設中の富郷ダム（事業費約1480億円1998年完成予定）などを見学し、午前11時に伊予三島市の金沙湖で解散した。

参加者は自分たちの体力の衰えと共に多くのことを感じた催しであったと思う。

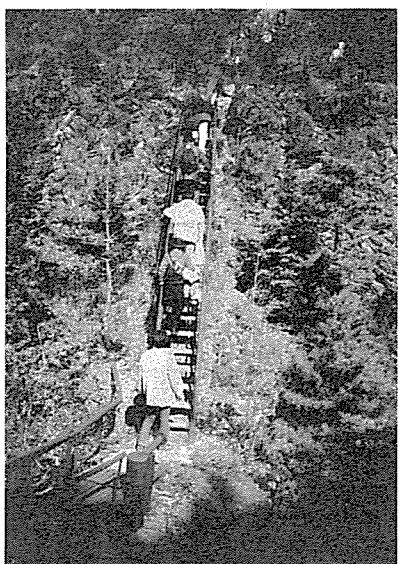


写真-1 硫酸銅の混じった谷間の水を眺めながら沢を登る



写真-2 劇場跡に残る石垣

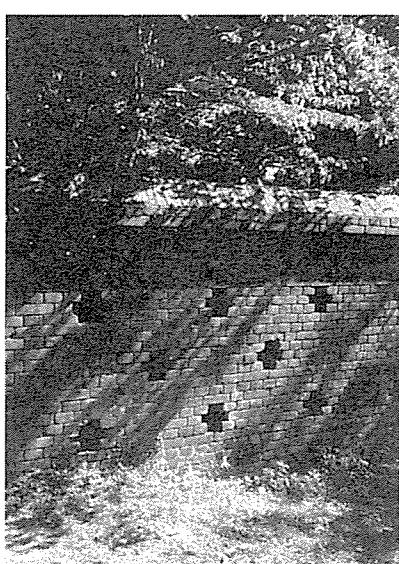


写真-3 接待館跡にのこるレンガ塀



写真-4 各地の地酒を持ち寄っての懇談会



写真-5 谷の中でこんもりと盛り上がった蘭塔場

第6回 JUDI国際セミナーのご案内

「日本在住の外国人プロフェッショナルによるまちづくり討論会」

日 時：1998年1月24日（土） 13:00～17:00

場 所：OZONEセミナールーム（新宿パークタワー8F）

講 師：長島孝一

アルベル・アビュト

慎 重進

ジョン・トフルマイヤー

三谷康彦

参加費：JUDI会員/学生 1000円

非会員 2000円

定員・申込み：100名（当日先着順）

問合せ：都市環境デザイン会議事務局

TEL03-3812-6664（担当：中村）

都市環境デザイン会議今後のスケジュール

	97年11月	12月	98年1月	2月	3月	4月	5月
本部	代表幹事会	代表幹事会	代表幹事会	代表幹事会 役員選挙	代表幹事会	代表幹事会	代表幹事会
広報出版委員会	JUDI NEWS 39号	委員会開催	JUDI NEWS 40号		JUDI NEWS 41号		委員会開催 JUDI NEWS 42号
研修研究委員会	協力法人会員向け アドバンスドプログラム'97、学生向 けセミナー（共催）		会員向け都市環境 デザインWS'97			委員会開催	学生向け都市環境 デザインセミナー
事業委員会	編集委員会	委員会開催	編集委員会		編集委員会		都市環境デザイン ガイドブック発行
国際委員会	委員会開催 国際セミナー記録 集発行		1/24第6回国際セ ミナー		委員会開催		第7回国際セミ ナー
北海道ブロック	11/1都市環境デザ イン会議in旭川	ミニシンポジウム		例会		例会	例会 ミニシンポジウム
東北ブロック	セミナー（前沢 町）			ブロック会議（弘 前）			
北陸ブロック			都市環境デザイン 会議in石川			情報通信誌「北陸 DOCUMENT」発 行	研究発表会、ブ ロック総会
関東ブロック		例会：懇親会	例会：セミナー		例会：視察会		例会：フォーラム
中部ブロック	月例会、研究例会	月例会、研究例会 会、交流会	月例会、研究例会	月例会、研究例会	月例会、研究例会	月例会、研究例会	月例会、研究例会
関西ブロック	シリーズ・セミ ナー、学生向セミ ナー（共催）	緊急セミナー「鶴川 芸術橋を考える」、 シリーズ・セミ ナー、ブロック総会		シリーズ・セミ ナー	シリーズ・セミ ナー	シリーズ・セミ ナー	シリーズ・セミ ナー
中国ブロック		研究会				ブロック会議	
四国ブロック	11/1-2合宿・見学 会（愛媛）		JUDInews四国發 行				JUDInews四国發行 運営会議・セミ ナー（徳島）
九州ブロック	研究報告会 (日田市)		例会		例会	例会	公開フォーラム

事務局より

1. 新会員の紹介

1997年9月1日～10月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

10月31日現在の会員数は、521名です。

氏名	勤務先
呂斌	(株)都市環境研究所/北京大学
熊澤 雄一	(株)都市計画設計研究所
野村 恭子	アジア航測(株)環境部
竹内きょう	竹内きょう環境・構造企画
重山陽一郎	高知工科大学

2. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容(新)
大谷寿美子	(株)旭ダンケ 〒070 旭川市神居町台場555-2 Tel. 0166-62-0852 Fax 0166-61-0864
金澤 成保	佐賀大学科学技術共同開発センター Tel. 0952-28-8961 Fax 0952-28-8186
近藤 周司	ケイコン(株)名古屋営業所 〒464 名古屋市千種区今池1-19-6 Tel. 052-732-8832 Fax 052-732-8838
斎藤 浩治	パシフィックコンサルタント(株)盛岡事務所 〒020 盛岡市菜園1-12-18 東邦生命ビル Tel. 019-623-6217 Fax 019-629-9223
酒井 信治	(株)風景設計社 〒815 福岡市南区向野2-14-1 Tel. 092-561-9225 Fax 092-561-9265
仙田 満	(株)環境デザイン研究所 〒106 東京都港区六本木5-12-22 Tel. 03-5575-7171 Fax 03-5562-9928

氏名	変更内容(新)
高波 和由	アスザック(株) 〒382 長野県上高井郡高山村大字中山981 Tel. 026-245-1001 Fax 026-245-9374
玉田 孝二	(株)都市環境研究所九州事務所 〒812 福岡市博多区奈良屋町1-15 Tel. 092-263-7848 Fax 092-263-7839
田村 美幸	自宅Fax. 045-421-8769 (株)ホルス計画室
辻井 順	〒064 札幌市中央区南1条西24-1-17 Tel & Faxは変更なし
土屋 邦男	建設省中部地方建設局 〒460 名古屋市中区三の丸2-5-1 Tel. 052-953-8195
寺岡 啓明	(株)椎名 〒769-02 香川県綾歌郡宇多津町浜三番丁25-21
藤江 秀一	アイ事務所 〒107 東京都港区赤坂9-6-17 (株)磯崎新アトリエ内
舟引 敏明	建設省関東地方建設局 〒100 東京都千代田区大手町1-3-1 Tel. 03-3211-1052 Fax 03-3211-8197
松谷 春敏	建設省都市局都市計画課 Tel. 03-5251-1855 Fax 03-5251-0457
宮田 隆弘	宮田建設(株) 〒780 高知市大川筋1-6-1 Tel. 0888-22-0768 Fax 0888-75-1780
吉田 清明	(株)ユーマック 〒171 東京都豊島区高田3-37-10 Tel. 03-5979-6811 Fax 03-5979-6850

編集後記

今回は「京都」そのものを特集にすることの大変なテーマである。どのような観点にするか迷い、京都駅完成もあったが文章にすると通り一遍のものになりそうでその扱い方にも苦慮していた折、田端先生から論文と寸評という面白い視点を頂き、その路線で全体を構成することにした。論文は「ずっと京都人、今は京都人、昔京都人、外から見てる人、京都を脱出した人」等様々な京都との関わりの視点からある特定のテーマについて語ってもらっている。

編集方針を協議した折に話題になったのがその数日前に発表になっていた「ポン・デ・ザール」の計画だった。これは全国に知らせねばとの意見から、これも寸評にいれることにしてスタートしたのだが、これからが大変。その時はこの「ポン・デ・ザール」が今ほどのうねりになるとは思いもしなかった。京都の多くの人々が意見書を提出するにもかかわらず、京都市は強硬に

この事業を押し進めようとして、そうすればするほどいろいろなグループが組織されてきている。その後この橋の問題の拡大によって、寸評を執筆頂いた方から立場上の理由での掲載辞退があつたり、当初予定していた京都市関係の方、政治家の方々への依頼も難しくなった。それでも寸評では多くの人の意見を端的に聞けたものと思っている。

そして12月の京都では、地球温暖化防止に向けた国際会議が開かれる。(清水泰博)

広報・出版委員会

土田 旭	松村みち子
沢木 俊間	伊藤 光造
近田 玲子	小林 郁雄
菅 孝能	清水 泰博
中島 猛夫	河本 一行
櫻井 淳	森川 稔
作山 康	吉田 慎悟